

平成 28 年度  
出雲市文化財調査報告書

出雲大社境内遺跡

2017年 3月  
出雲市教育委員会

# 平成 28 年度 出雲市文化財調査報告書

いずもおおやしろけいだいいせき  
**出雲大社境内遺跡**

2017年3月

出雲市教育委員会



# 序

出雲大社では、60年ぶりとなる「平成の大遷宮」が平成25年（2013）に執り行われました。

その関連事業として、宗教法人出雲大社におかれでは、「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物保存修理事業」、「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物防災施設事業」などが行なわれ、出雲市教育委員会では、境内全域が出雲大社境内遺跡にあたるため、掘削を伴う事業に際して、埋蔵文化財発掘調査を行ってまいりました。

本書では、国宝、重要文化財が建ち並ぶ境内の環境保全を目的に、平成25年（2013）度から平成27年（2015）度に行われた国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業及び出雲大社境内他排水対策工事、出雲大社石畳・玉砂利敷設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を報告します。本書にまとめた成果が、地域の歴史と文化財保護に対する理解と関心を高めるための一助となれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、格別のご配慮をいただきました宗教法人出雲大社に深く感謝申しあげます。また、多大なるご理解とご協力を賜りました関係者の皆様をはじめ、各方面の方々に対し心からお礼申しあげます。

平成29年（2017）3月

出雲市教育委員会

教育長 横野信幸



## 例　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、平成 25 年（2013）度から 27 年（2015）度に実施した出雲大社境内遺跡における次の 3 件の事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。

①国宝出雲大社本殿ほか 22 棟建造物環境保全事業（国庫補助事業）

②出雲大社境内他排水対策工事（出雲大社独自事業）

③出雲大社石壇・玉砂利敷設工事（出雲大社独自事業）

2. 発掘調査は下記の調査地、期間で実施した。

調査地　島根県出雲市大社町杵築東 195 番地　出雲大社境内

調査期間　平成 25 年度　平成 25 年 6 月 18 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 26 年度　平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

平成 27 年度　平成 27 年 4 月 13 日～平成 28 年 2 月 25 日

3. 調査は次の体制で行なった。※（ ）の数字は年度

調査主体　出雲市文化環境部（平成 25・26）、市民文化部（平成 27・28）

事務局　花谷 浩（学芸調整官　平成 25～28）

玉木 良夫（文化財課 課長　平成 25～27.6）

佐藤 隆夫（ 同 課長 平成 27.7～28）

穴道 年弘（ 同 課長補佐兼埋蔵文化財 1 係長 平成 25～28）

景山 真二（ 同 埋蔵文化財 2 係長 平成 25～27）

原 俊二（ 同 埋蔵文化財 2 係長 平成 28）

調査員　三原 一将（ 同 埋蔵文化財 1 係主任 平成 25・26）

佐々木歩美（ 同 埋蔵文化財 2 係主任 平成 27・28）

調査補助員　糸賀 伸文（ 同 臨時職員 平成 25・26）

小松原智明（ 同 臨時職員 平成 25～27）

足立 敏郎（ 同 臨時職員 平成 27）

大田 晴美（ 同 臨時職員 平成 27・28）

樋野 千晴（ 同 臨時職員 平成 27・28）

発掘作業員　大輝正人、金森光雄、周藤俊也、永井瑞枝、原 洋美、星野篤史

整理作業員　荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子、前島浩子、吉村香織

調査指導　角田 徳幸（島根県教育庁文化財課管理指導スタッフ企画官 平成 25）

深田 浩（ ）同 主幹 平成 26・27）

4. 調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々及び諸機関から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

宗教法人出雲大社、島根県教育庁文化財課、公益財團法人文化財建造物保存技術協会、島根県

立図書館、島根県立古代出雲歴史博物館、有限会社独立軒写真場、株式会社ワールド測量設計、  
株式会社中筋組、一畑工業株式会社

千家和比古（出雲大社権宮司）、北島建孝（出雲国造）、和田嘉宥（米子工業高等専門学校名誉教授）、  
中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員）、西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課特任講師）、松尾充晶  
(島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員)、岡 信治（公益財団法人文化財建造物保存技術協会参事）、  
守岡正司（島根県埋蔵文化財調査センター調査第二課長）

5. 本書の編集・執筆は、佐々木が行なった。
6. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影した。
7. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示す。レベル高は海拔高を示す。
8. 本書を作成するにあたり、「出雲大社社殿等建造物調査報告」(大社町教育委員会 2003 奈良文化財  
研究所編)掲載の下記の指図・絵図（いずれも部分）を参考にした。

慶長度 「紙本著色杵築大社近郷繪図」(北島家蔵、寛文4年(1664)頃)

寛文度 「社總繪圖」(出雲大社蔵、指図一) ··· 寛文度造替の際の指図

寛文度・延享度 「杵築大社宮中繪圖面」(出雲大社蔵、架蔵番号 40-31)

··· 慶応度造替の際の指図

延享度・文化度 「出雲大社全図」(島根県立図書館蔵、架蔵番号 114、文化7年(1810))

··· 文化度造替の際の指図

9. 本文中に使用した遺構の略号は次のとおりである。

SB：建物 SD：溝 SP：ピット SW：石垣 SX：その他の遺構

10. 本遺跡の出土品は出雲大社、図面・写真類は出雲市教育委員会で保管している。

# 目 次

序	
例　言	
第1章　調査に至る経緯と経過	1
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の経過	1
第3節　過去の調査の概要	3
第2章　遺跡の位置と境環	8
第1節　遺跡の位置	8
第2節　歴史的環境	8
第3章　調査の成果	12
第1節　瑞垣北側の調査	13
第2節　瑞垣東側の調査	19
第3節　瑞垣西側の調査	23
第4節　瑞垣南側の調査	24
第5節　南面荒垣周辺の調査	28
第6節　出土遺物観察表	34
第4章　まとめ	35
第1節　慶長度造営以前	35
第2節　寛文度造営	36
第3節　延享度造営以降	39
写真図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図 国宝出雲大社本殿ほか 22棟建造物環境保全事業 等計画図	3
第2図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所	5
第3図 出雲大社の位置図	8
第4図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第5図 国宝出雲大社本殿ほか 22棟建造物環境保全事業 等調査箇所位置図	12
第6図 素鷦社石垣 SW305 平面図	14
第7図 素鷦社石垣 SW305 立面図	15
第8図 石組水路 SD301 実測図	16
第9図 石組水路 SD302 実測図	17
第10図 石垣 SD303・SD304 実測図	18
第11図 素鷦社石垣 SW305 出土遺物実測図	19
第12図 道構外出土遺物実測図	19
第13図 石組水路 SD401・SD402 実測図	20
第14図 平成 23 年度調査区位置図と寛文度瑞垣想定ラ イン	21
第15図 石垣 SW403 (石列 SX404・石組水路 SD405) 実測図	22
第16図 石組水路 SD401・石垣 SW403 出土遺物実測図	23
第17図 道構外出土遺物実測図	23
第18図 石組水路 SD501 実測図	24
第19図 延享度庁舎に伴う道構実測図	25
第20図 石垣 SW611 実測図	27
第21図 石垣 SD612 実測図	28
第22図 ピット SP613～617 実測図	29
第23図 道構外出土遺物実測図	29
第24図 石組水路 SD701 実測図	30
第25図 石組水路 SD702 実測図	31
第26図 石組水路 SD703 実測図	31
第27図 鉄滓出土地点	32
第28図 石組水路 SD701・SD703 出土遺物実測図	33
第29図 石組水路 SD702・荒垣出土遺物実測図	33
第30図 出雲大社境内道路の基本層序模式図	35
第31図 建物跡 SB01 と慶長度の道構配置図	37
第32図 寛文度境内推定復元図	38

## 挿 表 目 次

第1表 調査概要と道構の取り扱い	2
第2表 過去の主な調査一覧	6

## 写 真 目 次

写真1 出雲大社境内	11
写真2 素鷦社南面石段下の石列（南から）	13
写真3 石組水路 SD401（南から）	20
写真4 石組水路 SD402（南から）	20
写真5 修理前状況（南から）	20

## 図 版 目 次

図版1 素鷦社石垣の調査	
図版2 瑞垣北側の調査	
図版3 寛文度瑞垣 SW403 の調査	
図版4 延享度庁舎跡の調査	
図版5 石垣 SW611 の調査	
図版6 南面荒垣周辺の調査	
図版7 出土遺物（1）	
図版8 出土遺物（2）	

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

出雲大社平成の大遷宮は、宗教法人出雲大社によって平成20年（2008）度から実施されている事業である。今回埋蔵文化財発掘調査を行った「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業」は、平成の大遷宮にあわせ、「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物保存修理事業」及び「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物防災施設事業」などとともに実施された文化財保存修理事業（国庫補助事業）の一つである。この事業では、平成25年（2013）度から27年（2015）度に、国宝本殿ほか22棟建造物の環境保全を図るために、境内の排水整備、樹木伐採等整理、素鷲社の石垣修理などが実施された。

また、この事業と並行して、宗教法人出雲大社の独自の事業として、境内およびその周辺の環境保全を図るために、境内他排水対策工事および石畳・玉砂利敷設工事が実施された。

これらの事業により掘削される境内は、出雲大社境内遺跡内であることから、出雲市教育委員会は、文化財保護法に基づき、発掘調査を実施するに至った。

## 第2節 調査の経過

出雲大社境内遺跡で平成25年度から27年度に実施した埋蔵文化財発掘調査について、事業ごとに経過をまとめておく。調査に伴い遺構が発見された際には、その都度、鳥根県教育委員会の指導を受け、事業者及び施工者と協議した。やむを得ず記録保存となった遺構はあるものの、可能な限り設計変更に努めていただき、遺構を現状保存した（第1表・第1図）。

### 1. 国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、工事の進捗状況にあわせ、平成25年（2013）6月から平成27年（2015）12月まで行った。境内の地下に敷設・改修される排水路約1000mについて工事立会し、このうち遺構・遺物が発見された約100m部分を発掘調査した。また、素鷲社石垣や既設石組水路の改修がなされるものについては、工事に先立ち、現状を調査し図面作成などを行った。各年度の調査概要と遺構の取り扱いは、第1表のとおりである。

### 2. 出雲大社境内他排水対策工事及び石畠・玉砂利敷設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

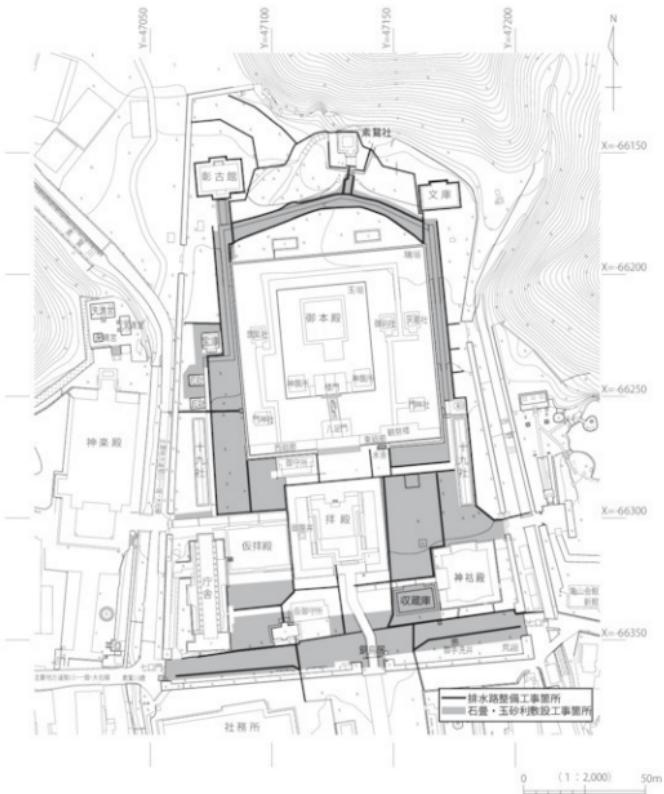
国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業とともに、境内では、出雲大社の独自の事業となる境内他排水対策工事及び石畠・玉砂利敷設工事が実施された。工事の進捗状況にあわせ、それぞれ平成26年（2014）3月から平成28年（2016）1月、平成26年（2014）4月から平成28年（2016）2月まで発掘調査を行った。

境内他排水対策工事に伴い敷設される水路は約470mに及び、このうち工事立会により、遺構が確認された約30m部分を発掘調査した。石畠・玉砂利敷設工事においては、序舎東側の265.5mの範囲で、延享度の建物遺構が発見される可能性が高いと想定されたため、事前に調査を行った。その

ほかの 6,652m<sup>2</sup>は、掘削深度が 10 ~ 20cm と非常に浅いため、工事立会を行った。各年度の調査概要と遺構の取り扱いは、第1表のとおりである。

第1表 調査概要と遺構の取り扱い

事業	年度	調査原因 (計画開削幅／掘削深度)	調査遺構	遺構の取り扱い	
国宝出雲大社本殿ほか 22棟建造物 環境保全事業	平成25	排水路整備 (717mm / 550mm)	瑞垣 北側	文庫南石組水路 (SD301)	記録保存。
		排水路整備 (817mm / 550mm)	瑞垣 北側	彰古館南石組水路 (SD302)	新設排水路が遺構に影響を与える部分は、記録後側石を取り外し。残りの部分は現状保存。
		排水路整備 (500mm / 490mm)	瑞垣 北側	文庫西石植 (SD303・SD304)	新設排水路が遺構に影響を与える部分は、記録後石植を取り外し。残りの部分は現状保存。
		排水路整備 (500mm / 490mm)	瑞垣 北側	参道縁石	着工前に現状を記録。工事で縁石が取り外されたが、工事完了後、現状どおり復旧。
		排水路改修 (側石積み直し・水路底面レベルの調整)	瑞垣 東側	東七口門西側石組水路 (SD402)	修理前状況を記録。
	平成26	石垣修理・排水路整備 (石垣の積み直し・除根)	瑞垣 北側	素麿社石垣 (SW305)	修理前状況を記録。
		排水路改修 (側石積み直し・水路底面レベルの調整)	瑞垣 東側	東十九社東側石組水路 (SD401)	修理前状況を記録。
		排水路整備 (500mm / 490mm)	瑞垣 東側	寛文度東面瑞垣 (SW306)	現状保存。
		排水路改修 (側石積み直し・暗渠排水化)	瑞垣 西側	西十九社北側石組水路 (SD501)	修理前状況を記録。
		排水路整備 (1600mm / 1196mm)	南面 荒垣	荒垣下石組水路 (SD702)	工事の計画変更により、現状保存。
	平成27	樹根除去	瑞垣 東側	寛文度東面瑞垣 (SW404)	現状保存。
		排水路整備 (710mm / 830mm)	瑞垣 南側	延享度序倉雨落溝 (SD609 南辺一部・東辺)	工事の計画変更が困難であるため、記録保存。ただし、工事に影響しない部分は現状保存。
		排水路整備 (710mm / 830mm)	瑞垣 南側	慶長度以前の石垣 (SW611)	工事の計画変更が困難であるため、南面石垣の上段の石は取り外し。残りの部分は現状保存。
		排水路整備 (817mm / 500mm)	瑞垣 南側	瑞垣南西石植 (SD612)	新設排水路が遺構に影響を与える部分は、記録後石植を取り外し。残りの部分は、工事の計画変更により、現状保存。
		排水路整備 (1550mm / 920mm)	南面 荒垣	東南七口門東側石組水路 (SD701)	工事の計画変更により、現状保存。
出雲大社境内他 排水対策工事	平成25	排水路整備 (500mm / 490mm)	瑞垣 北側	参道縁石	着工前に現状を記録。工事で縁石が取り外されたが、工事完了後、現状どおり復旧。
		排水路整備 (500mm / 490mm)	瑞垣 北側	文庫西石植 (SD303・SD304)	新設排水路が遺構に影響を与える部分は、記録後石植を取り外し。残りの部分は現状保存。
	平成26	排水路整備 (620mm / 715mm)	南面 荒垣	西南七口門東側石組水路 (SD703)	工事の計画変更により、現状保存。
	平成27	排水路整備 (620mm / 715mm)	瑞垣 南側	延享度序倉雨落溝 (SD609 南辺・西辺)	新設排水路が遺構に影響を与える部分は、記録後側石を取り外し。残りの部分は現状保存。
		排水路整備 (1500mm / 1010mm)	瑞垣 南側	拝殿南ビット群 (SP613・SP617)	記録保存。
出雲大社石骨・玉砂利 敷設工事	平成26	石骨・玉砂利敷設 (掘削深度 200mm)	—	—	工事立会。
	平成27	石骨・玉砂利敷設 (掘削深度 200mm)	瑞垣 南側	延享度序倉跡 (SB601)	現状保存。
		石骨・玉砂利敷設 (掘削深度 200mm)	瑞垣 南側	延享度序倉南方石組水路 (SD610)	現状保存。



第1図 国宝出雲大社本殿ほか 22棟建造物環境保全事業等計画図

### 第3節 過去の調査の概要

出雲大社境内遺跡では、これまでに十数回にわたり埋蔵文化財発掘調査が行なわれている。既に明治時代の終わり頃には、境内からの土器や石器の出土が確認されていた（花谷 2012・2013）が、考古学的観点から遺跡と認識されることになったのは、昭和 18 年（1943）の仮殿建設の際に遺物が収集されたことによる（大社町史編集委員会 2002）。昭和 28 年（1953）に拝殿等が火災で焼失したこと为契机に実施された本殿防災施設工事の際（昭和 29・30 年）に、本遺跡最初の発掘調査が行われて以降、事業の実施に伴い発掘調査が行なわれており、その概要は第2図、第2表のとおりである。

本報告の前に、これまでの発掘調査成果の概要を整理しておく。

1. 防火水道用鉄管埋設工事に伴う発掘調査（第2図②③） 昭和29年（1954）に、防火水道用の鉄管埋設工事に伴う調査、昭和30年（1955）に、銅鳥居東方約20m地点の地下貯水タンク構築のための調査が実施された。鉄管埋設工事では、荒垣内の各所から広く遺物が出土し、境内全体が遺跡であることが認識された。西南七口門東側では、木の鳥居の柱根を検出し、根固めのために埋められた可能性のある石塊が出土した。東十九社西側、素鷦社南方では石列、境内南方では南北に延びる中世以降の溝跡3条が確認されている。地下貯水タンク建設に伴う調査では、縄文時代晚期から平安・鎌倉時代（12～13世紀）の遺物が出土している（出雲大社 1956）。

2. 拝殿建設工事に伴う発掘調査（第2図④） 昭和32年（1957）、33年（1958）に、拜殿再建工事に伴う調査が行われ、延享度の拜殿跡、天正～慶長度の溝跡・礎石群、14～16世紀の本殿に伴う柱が確認されている。出土遺物は、縄文時代晚期から現代に至るまでほぼ連続しているが、弥生時代後期から古墳時代前期、江戸時代前期（17世紀前半）の遺物量が多いことが指摘されている（景山ほか 2004）。

3. 庁舎建設工事・拜殿北地下室増設工事・神楽殿建設工事及び神祐殿建設工事に伴う調査（第2図⑤⑥⑦⑧） 昭和37年（1962）の庁舎建設工事では、工事立会によって弥生時代中期から中世の遺物が確認されている。また、昭和43年（1968）の拜殿北地下室増設工事では、弥生時代前期から中世の遺物が出土している。昭和54年（1979）の神楽殿建設工事、昭和55年（1980）の神祐殿建設工事の際にも遺物が採取されている（大社町史編集委員会 2002）。

4. 地下祭礼準備室建設に伴う発掘調査（第2図⑨） 平成11年（1999）度に、祭礼準備のための地下室建設に伴い発掘調査が実施された。大型本殿遺構に隣接する礎集中遺構を検出したほか、室町・戦国時代頃の本殿遺構及び玉垣を確認した。また、慶長度の本殿階段跡を確認した（景山ほか 2004）。

5. 国庫補助事業による内容確認調査（第2図⑩⑪⑫） 平成12～14年（2000～2002）、内容確認調査として、八足門前、彰古館北、拜殿南の調査を行った（景山ほか 2004）。

（1）八足門前の調査（第2図⑩） 地下祭礼準備室建設に伴う調査区を引き続き調査したところ、宝治度本殿の3本束ねの柱（宇豆柱）が見つかった。さらに調査区を拡張して調査した結果、心御柱ほか巨大柱を3か所で確認した。また、寛文度の拜殿に伴う柱跡1か所と慶長度本殿跡と考えられる柱跡を4か所確認した。

（2）彰古館北の調査（第2図⑪） 本殿北側、彰古館北東部を調査したところ、縄文時代晚期の遺物が出土した。土層堆積状況から、境内北部域は中世以降に境内面として利用されたことが分かった。

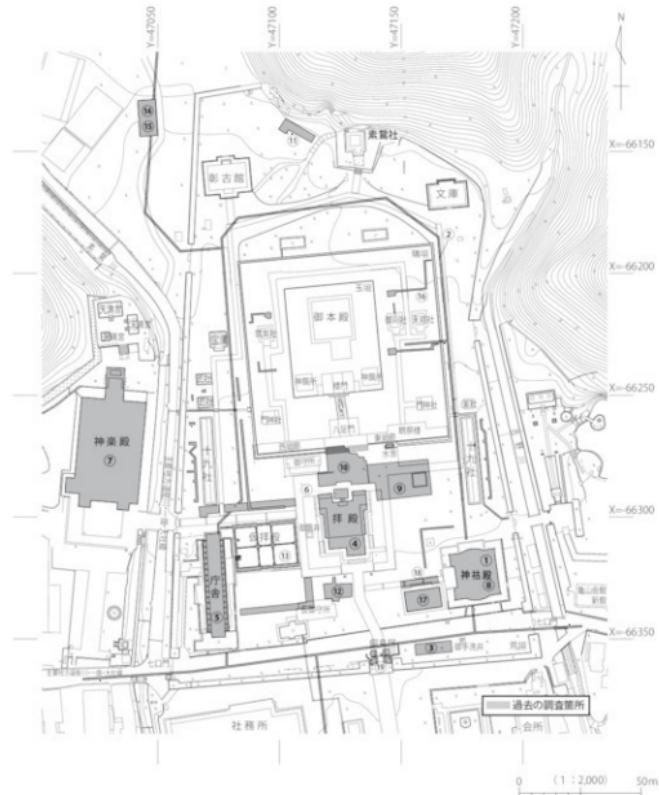
（3）拜殿南の調査（第2図⑫） 拜殿南を調査したところ、慶長度の建物跡と考えられる基壇と柱跡を確認した。また、古墳時代終末期～奈良時代（7～8世紀）に機能した流路1条を確認した。

6. 仮拜殿建設工事に伴う発掘調査（第2図⑬） 平成19年（2007）2月、出雲大社平成の大遷宮による仮拜殿建設工事に伴う発掘調査を実施した。建物の基礎部分を発掘調査したところ、溝（石列）を確認した。昭和28年の火災で焼失した延享度建築の庁舎に伴う雨落溝の一部と考えられる（曾田 2013）。

7. 国宝出雲大社本殿ほか 22 棟建造物防災施設工事に伴う発掘調査（第2回⑭⑮⑯） 平成 21～23 年（2009～2011）度に、出雲大社平成の大遷宮により実施された防災施設工事に伴い、本殿北西の奥谷遺跡（荒垣外）及び出雲大社境内遺跡（瑞垣内を含む荒垣内）の調査を行った（曾田 2013）。

(1) 奥谷遺跡（荒垣外）の調査（第2図⑭⑯） 荒垣北西部に設置される防火水槽予定地を試掘調査したところ、奥谷遺跡の存在を確認した。本調査では、遺構は確認できなかったが、13世紀頃の遺物をはじめ、近世を中心に現代に至るまでの土師器・陶磁器が出土した。

(2) 出雲大社境内遺跡（荒垣内）の調査（第2図16） 瑞垣内で初めて発掘調査を行った。送水管が敷設される4か所、63mを調査し、寛文度造成土中に溝状の断面を確認し、寛文度造営の瑞垣の位置を想定できた。瑞垣外では、送水管敷設に伴う調査で、主に近世の土師器・陶磁器が出土した。末社十九社本殿（西）の東側では、室町時代の瓦が敷かれた瓦敷き遺構を検出したほか、御手洗井近くの



第2図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所

表土下 60cmから、焼土とともに鉄滓が出土した。

8. 出雲大社美術工芸品収蔵庫建設に伴う発掘調査（第2図⑨） 平成25年（2013），神祐殿西側に美術工芸品収蔵庫が建設されるのに伴い，発掘調査を実施した。文化6年（1809）の遷宮に際し建てられた仮設建物の可能性がある建物跡1棟と溝状遺構1条，土坑數十穴を確認した<sup>(1)</sup>。

9. 出雲大社収蔵庫の渡り廊下建設に伴う発掘調査（第2図⑩） 平成26年（2014），神祐殿西側に渡り廊下が建設されるのに伴い，発掘調査を実施した。南に隣接する美術工芸品収蔵庫建設に伴う発掘調査の調査区で確認した溝状遺構の続きが見つかった<sup>(2)</sup>。

第2表 過去の主な調査一覧

調査位置	工事・調査の名称	調査年	概要
①	假拝殿建設工事	昭和18年（1943）	遺物採取（弥生後期～中世土師器）
②	本殿防災施設工事（真管埋設に伴う）	昭和29年（1954）6月	遺物採取（縄文晩期～中世土師器），鳥居基部の大柱根
③	本殿防災施設工事（地下防水タンク設置）	昭和30年（1955）6月	遺物採取（縄文晩期～中世土師器）
④	新拝殿建設工事	昭和32年（1957）9月～昭和33年（1958）1月	縄文晩期～近世の土器・陶磁器，中世の振立柱柱根，本殿遺構，天正度・慶長度（近世初期）の基礎建物・溝跡
⑤	序舎建設	昭和37年（1962）	遺物採取（弥生中期～中近世土師器）
⑥	拝殿北地下室増設工事	昭和43年（1968）	遺物採取（縄文晩期～中近世土師器）
⑦	神楽殿建設	昭和54年（1979）	遺物採取
⑧	神祐殿建設	昭和55年（1980）	遺物採取
⑨	地下祭礼準備室建設	平成11年（1999）9月～平成12年（2000）3月	弥生後期～近世土器・陶磁器，古墳時代の玉類，中世の埴輪，宝治度（鎌倉時代）の本殿遺構
⑩	内容確認調査（八足門前）	平成12年（2000）4月～平成13年（2001）11月	平安時代～近世土器，宝治度（鎌倉時代）の本殿遺構，慶長度（近世初期）の本殿遺構ほか
⑪	内容確認調査（奥古館北）	平成13年（2001）12月～平成14年（2002）3月	縄文晩期・中世～近世の土器・陶磁器，中世の遺構面ほか
⑫	内容確認調査（拝殿南）	平成14年（2002）6月～12月	弥生中期～近世の土器・陶磁器，慶長度（近世初期）の御供所ほか
⑬	仮拝殿建設工事	平成19年（2007）2月	延享序舎の雨落溝
⑭	遺跡確認調査（奥谷）	平成20年（2008）11月～平成21年（2009）2月	中世土師器・近世陶磁器
⑮	本殿ほか22棟建造物防災施設工事（奥谷防跡）	平成21年（2009）6月～9月	中世～近世の土師器・陶磁器
⑯	本殿ほか22棟建造物防災施設工事（境内）	平成22年（2010）6月～平成23年（2011）1月	弥生時代～近世土師器・陶磁器，中世の瓦敷き遺構ほか
⑰	収蔵庫建設	平成25年（2013）7月～10月	文化度の建物跡，溝状遺構，土坑
⑱	渡り廊下建設	平成26年（2014）7月	文化度の溝状遺構，土坑
⑲	銅鳥居修理	平成27年（2015）2月～9月	中世～近世の土師器・陶磁器・古錢

10. 重文出雲大社銅鳥居修理に伴う掘削に係る発掘調査（第2図⑨） 平成27年（2015）、「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物保存修理事業」により、南に傾いていた銅鳥居が修理された。地下構造の把握と傾きの原因調査のため発掘調査を行ったところ、銅鳥居は礎石建ちで、根巻石、据石、飼石により堅固に支えられていたことがわかった。しかし、鳥居周辺から樹根が侵入したため、堅固な石組がゆるみ、柱が傾いた可能性が考えられた<sup>(3)</sup>。

これまでの調査により、境内の広範囲から遺物が出土し、出雲大社境内遺跡は、縄文時代晚期から現代まで続く複合遺跡であることがわかっている。調査の多くが、境内における工事に伴うものであり、遺構を部分的にしか調査することができず、全体像の把握が難しいが、境内利用の変遷の解明につながっている。

#### 【註】

- (1) 平成29年度報告予定。
- (2) 註(1)と同じ。
- (3) 註(1)と同じ。

#### 【参考文献】

- 出雲大社 1956『出雲大社國寶防災施設工事報告書』  
 出雲大社 1986『拝殿地下調査報告書』  
 嶽山真二ほか 2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会  
 曾田辰雄 2013『第Ⅲ部 発掘調査』『国宝出雲大社本殿ほか22棟防災施設工事報告書』宗教法人出雲大社  
 大社町史編集委員会 2002『大社町史 史料編（民俗・考古資料）』大社町  
 花谷浩 2012『瓦礫陶拾遺 その2—「長谷川コレクション」の全容I—』『出雲弥生の森博物館研究紀要』第2集 出雲弥生の森博物館  
 花谷浩 2013『瓦礫陶拾遺 その3—「長谷川コレクション」の全容II—』『出雲弥生の森博物館研究紀要』第3集 出雲弥生の森博物館

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

出雲大社境内遺跡は、島根県出雲市大社町杵築東に所在する。遺跡が所在する出雲市は、島根県東部に位置し、北は島根半島、南は中国山地に囲まれ、東は宍道湖に、西は日本海に面している。このうち出雲市街地の北西部にあたる大社町は、島根半島の西端部の山地とその南に接する出雲平野の北西部からなり、平野部の海岸沿いには南北に砂丘が延びる（第3・4図）。

出雲大社境内遺跡は、島根半島を形成する北山山麓に鎮座する出雲大社の境内に位置し、荒垣で囲まれた境内域が範囲である。北に八雲山、東に亀山、西に鶴山と三方を山に囲まれ、この山々の谷筋から南へ流れる吉野川と素鷦川の間に境内が広がっている。

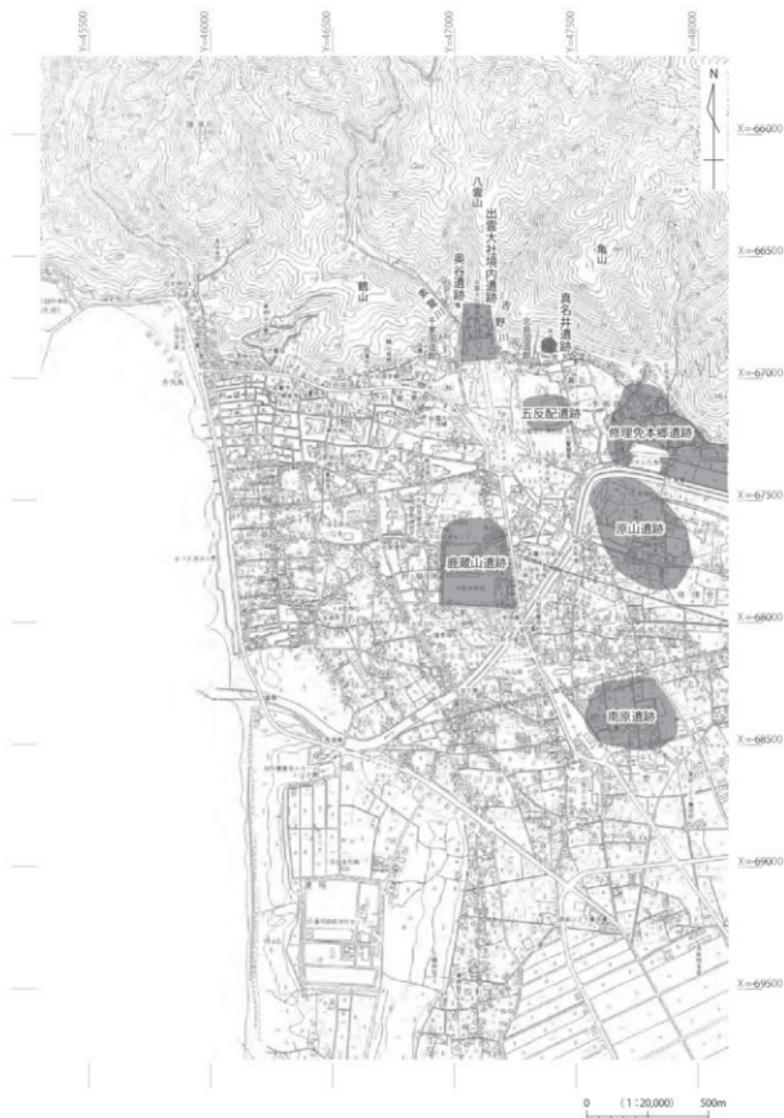
### 第2節 歴史的環境

出雲大社境内遺跡は、先述したように、縄文時代晚期から現代まで連続する複合遺跡である。最も古い遺構は、古墳時代前期の溝で、溝内とその周辺から多量の土器と玉類が集中し出土していることが注目される。遺跡周辺には、弥生時代前期の配石墓が確認された原山遺跡、銅戈と勾玉が見つかった真名井（眞名井：マハケ）遺跡、奈良三彩や緑釉陶器、鉄鉢形土器などが出土した鹿藏山遺跡などが所在する（第4図）。

出雲大社の創建に関しては、『古事記』や『日本書紀』のなかで、巨大神殿の建造について語られ



第3図 出雲大社の位置図 (□内は第4図)



第4図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡

るが、具体的な年号がわかる記述としては、『日本書紀』の齊明天皇5年（659）是歳条が初出である。『出雲国風土記』では、その神殿の高さの由来や用材の採取地について記されている。当時、出雲国造の本拠地は出雲東部の意宇郡にあり、同郡には国府が置かれ、政治・祭祀の中心となっていたが、平安時代中頃には、国造は拠点を杵築へ移し、杵築大社が祭祀の中心となる。出雲国造が天皇に奏上した「神賀詞」から、熊野大社と杵築大社が大穴持命（大国主命）を祀っていることがわかるが、国造が杵築へ移った後の平安時代末期には、杵築大社が「國中第一の靈神」と呼ばれるようになるなか、主祭神は素戔鳴尊へと転換する。

古代における出雲大社の社殿の造営については、史料が残されておらず明確ではない。11世紀以降については、「杵築大社造営覚書」（佐草家藏、応永19年（1412））、「杵築大社旧記御遷宮次第」（鈴鹿寺文書、近世初め頃）などから造営の変遷をたどることができる。中世の社殿は、16丈（約48m）であったと伝えられる（「杵築大社旧記御遷宮次第」）。高層建築の根拠となっているのが、文献に残る康平4年（1061）、天仁元年（1108）、保延7年（1141）、承安2年（1172）、嘉禄元年（1225）の社殿転倒の記録である。出雲大社境内遺跡で発見された巨大な3本束ねの柱を持つ社殿は、宝治2年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。中世において正殿式造営が行なわれたのは、この宝治度までで、これ以降は仮殿式造営が続き、正殿式造営が再び行われるのは、寛文度の造営遷宮（寛文7年（1667））である。

平安時代後期から鎌倉時代において、杵築大社の造営は、国家が直接指揮、管理し行っていた。室町時代になると、造営主体が大社神官と出雲国守護に替わるが、応仁・文明の乱以後、勧進聖（寺院の僧らで構成）の募金活動などによって造営がなされる。戦国時代には、出雲国を支配した戦国大名尼子氏が杵築大社の造営を主導し、永正16年（1519）は経久、天文19年（1550）は晴久が造営遷宮を行い、大日堂や三重塔を建てるなど境内の寺院様式化が図られる。天文度以降は、造営事業に大社本願（寺社の修理・造営にあたる勧進聖）が制度的に関与するようになった。続く天正8年（1580）の造営は、尼子氏を継ぎ出雲国を支配した戦国大名毛利元就の孫輝元、慶長14年（1609）の造営は、豊臣秀頼によって行われた。慶長度造営後の境内の様子が描かれた『紙本著色杵築大社近郷絵図』（北島家藏）には、朱塗り柱の本殿を中心に、三重塔や鐘楼、大日堂などが描かれている。

境内から仏教色が排除されるのは、次の寛文度造営である。幕府の財政援助を受けて、松江藩主松平直政が造営を行った。この寛文度造営では、本願を追放し、境内の仏教建築が移築・破壊された。また、宝治度遷宮以来の正殿式が採用され、高さ8丈（24m）の本殿が造られ、現在の出雲大社境内の形態が整えられた。主祭神も素戔鳴尊から大国主命に復されている。

現在の本殿は、延享元年（1744）に造営されたものである。これ以降、文化6年（1809）、明治14年（1881）、昭和28年（1953）、そして、今回の平成25年（2013）の修造遷宮を経て、今日に至る。

このように出雲大社では、長い年月の間に幾度の造営遷宮が執り行われてきた。出雲大社境内遺跡は、この造営遷宮の痕跡が複雑に重複する遺跡である。

**【参考文献】**

- 出雲大社社務所 2001『出雲大社由緒略記』
- 出雲弥生の森博物館編 2013『2013年特別展 もう一つの出雲神話—中世の鯉淵寺と出雲大社—』
- 景山真二ほか 2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会
- 島根県古代文化センター編 2002『島根県の歴史を語る古文書 出雲大社文書—中世杵築大社の造営・祭祀・所領一』
- 大社町史編集委員会編 1991『大社町史 上巻』大社町
- 大社町史編集委員会編 2002『大社町史 史料編(民俗・考古資料)』大社町
- 奈良文化財研究所 2003『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会



写真1 出雲大社境内（写真提供：有限会社独立軒写真場）

## 第3章 調査の成果

国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業等に伴う発掘調査により、12か所で遺構が見つかり調査を行った。このうち、完掘した遺構は2か所のみである。そのほかの遺構は、掘削深度が浅い工事での発見や、工事計画の変更により遺構が壊されことになったことから、遺構上面の確認のみで、完掘には至らず調査を終了している。また、石垣や石組水路の改修に伴う事前調査は5か所で行なった。

以下、調査の成果を、瑞垣北側、瑞垣東側、瑞垣西側、瑞垣南側、南面荒垣周辺の5つの調査区に分けて報告する（第5図）。



第5図 国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業等調査箇所位置図

## 第1節 瑞垣北側の調査

瑞垣北側調査区には、素鷦社、彰古館、文庫が位置する。ここでは、素鷦社石垣の修復工事に先立ち、図面作成等を行った。また、排水路整備工事に伴う工事立会で、石組水路が4条見つかった。

### 第1項 素鷦社石垣の調査（第6・7図、写真2、図版1）

素鷦社は、境内の北端、八雲山の麓に位置する。素鷦社本殿は、寛文度造営時、北島国造館が八雲山の麓から現在地（出雲大社境内東側）に移築された後に建てられたが、延享度造営時には、現在の社殿に建て直されている。修復された石垣は、指図・絵図との比較検討から、延享度の構築と推測される。

この石垣は、石の間に樹根が侵入し、乱れが激しく、崩れる恐れがあったことから、今回修復が行なわれた。

**石垣 SW305（第6・7図）** 社殿の東、南、西の3面に築かれた上下2段の基壇を作り出す石垣である。石垣が築かれていらない北面には、背後の丘陵がせまる。

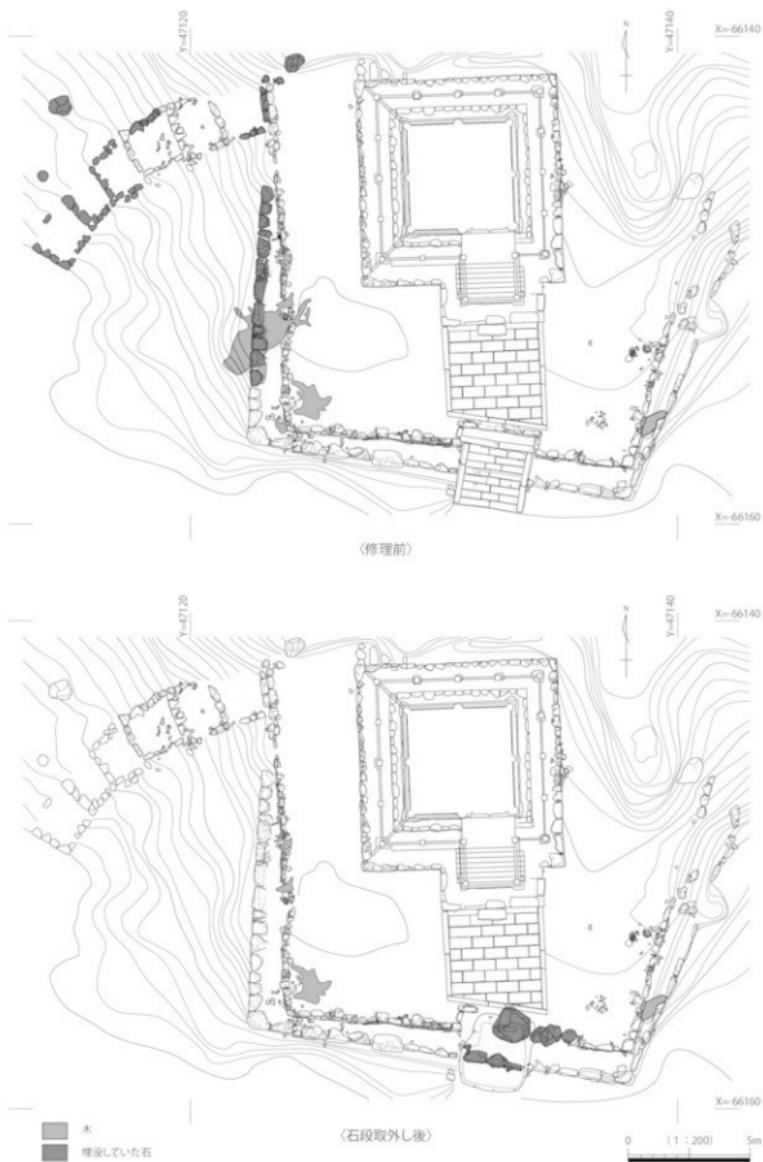
下段は、高さ0.5～0.9mの石垣で、切石が積まれている。延長は38.6mあるが、西面の8.2m分は、地表下に埋没していた。天端には幅1～1.2mの平坦面が設けられており、その内側に上段の石垣が築かれている。上段は、延長40.3m、高さ0.7～0.8mの石垣で、割石が積まれている。石垣の下段と上段で、軸線の傾きや石の積み方が異なることから、時期差、造り替えが想定されるが、今回の調査では、確認することができなかった。

石垣修復とあわせて行われた排水路整備に伴い、南面の石段を取り外したところ、盛土内から段状の石列が見つかった（写真2）。それぞれ、基壇を作り出す2段の石垣の軸線状に並ぶ。下段は切石が並び、今回修復された下段石垣の一部と考えられるが、上段は、径150cmを超す自然石を含む3つの石が並び、石の形や大きさから、南面石垣の一部とは考えにくい。寛文度の指図と推定される「社縦繪圖」や「杵築御本社縦繪圖」（鳥根県立図書館蔵）などの絵図には、現在とは異なる形状の石垣が描かれていることから、寛文度造営時に積まれた石垣の可能性がある。

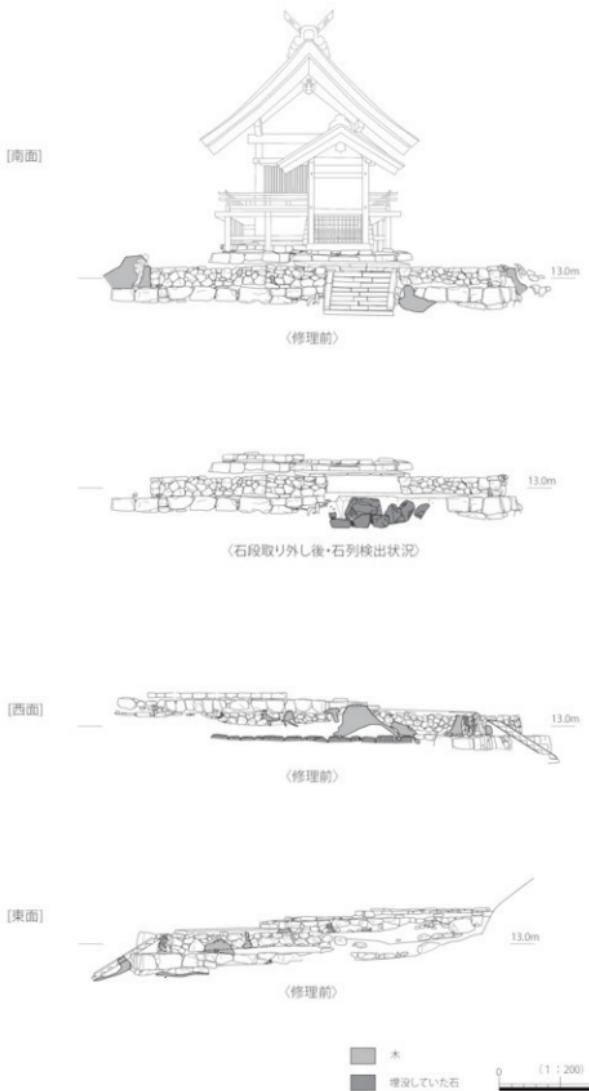
下段西面の埋没部分を掘削時に、和釘や古銭（寛永通宝）が出土している。



写真2 素鷦社南面石段下の石列（南から）



第6図 素齋社石垣 SW305 平面図

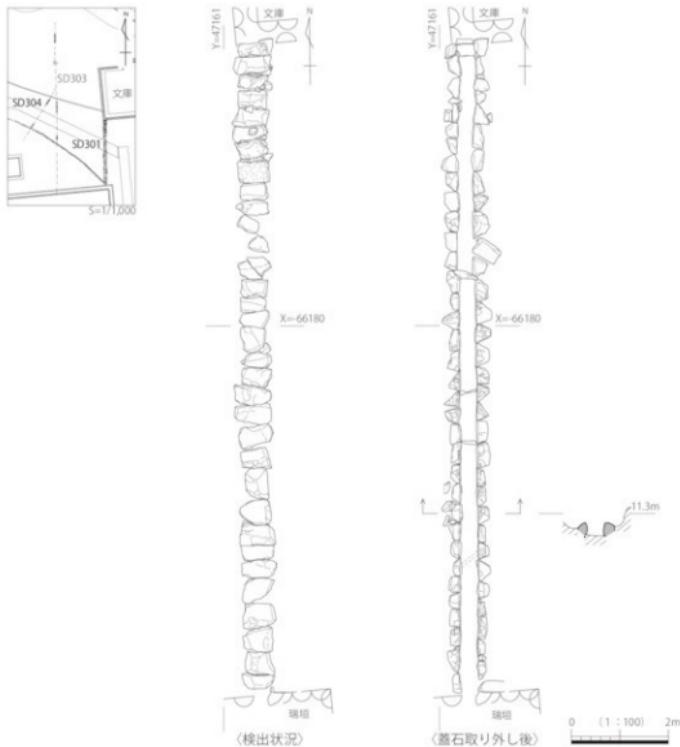


第7図 素鷦社石垣 SW305 立面図

## 第2項 遺構の調査（第8～10図、図版2）

石組水路4条を調査した。また、工事により動かされる可能性のあった参道縁石の現状を記録した。石組水路SD301（第8図、図版2） 文庫の雨落溝南西隅から瑞垣の北東隅に向けて敷かれた南北水路である。割石で組まれた水路で、延長13.5m、内幅0.35m、深さ0.26mで、底石はない。蓋石には、幅60～70cm、厚さ10～20cm前後の表面が平らな石が用いられている。文庫は元々、本殿の北西、現在の彰古館の位置にあったが、彰古館建設に伴い、大正元年（1912）に現在地に移設されている。SD301は、この移設時に敷かれたものである。

石組水路SD302（第9図） 彰古館の雨落溝の南張り出し部南東隅から瑞垣北西隅まで敷かれた南北水路である。割石で組まれた水路で、延長26mのうち17.2m分を調査したが、既に一部が壊されていた。水路は、内幅約0.3m、深さ約0.3mで、底石はない。蓋石には、幅30～40cm、厚さ10～20cmの平らな石が用いられている。大正3年（1914）の彰古館建設時に敷かれた水路である。



第8図 石組水路SD301 実測図

石樋 SD303（第10図、図版2） 文庫の西で見つかった砂岩製の石樋を連結させた水路で、南北方向に延びる。断続的に見つかった3か所（①～③）を調査した。石樋を連結させた上に板状の蓋石を乗せる構造は共通するが、場所によって、石樋や蓋の長さ、幅が異なる。

①の部分では、蓋石の上面が地表に露出していた。蓋石は、長さ30～35cm、幅21cm、厚さ7cmの板状である。この下に、長さ65cm、幅21cm、厚さ18cmの砂岩を凹状に加工した石樋（内幅13cm、深さ11cm）が連結して延びる。②の部分の蓋石は、長さ97～98cm、幅22cm、厚さ7cmの板状である。



第9図 石組水路 SD302 実測図

この下に、長さ 128cm、幅 22cm、厚さ 13cm の砂岩を凹状に加工した石樋（内幅 9cm、深さ 6cm）が連結して延びる。③の部分では、蓋石のみ見つかった。長さ 62cm、幅 18cm の板状である。

調査したのは約 22m の区間であるが、この水路は瑞垣に向け延びている。延享度に造られた瑞垣の下をくぐることから、延享度かそれ以前の水路と考えられる。

**石樋 SD304（第10図）** 砂岩製の石樋を連結させた水路で、南西方向に延びる。断続的に 2か所で見つかった。掘削範囲が狭小で、かつ蓋石が壊れていたこともあり、詳細を確認できなかったが、板状の蓋石の下に、幅 20cm、厚さ 12cm の砂岩を凹状に加工した石樋（内幅 9cm、深さ 8cm）が連結して延びる。石樋 SD303 と同時代のものと考えられる。

**参道縁石（図版2）** 縁石は、境内北部の参道両脇に置かれている。用いられているのは、径 20～30cm の自然石を中心とする。遺物等ではなく、縁石が置かれた時期は不明である。

### 第3項 出土遺物（第11・12図、図版7）

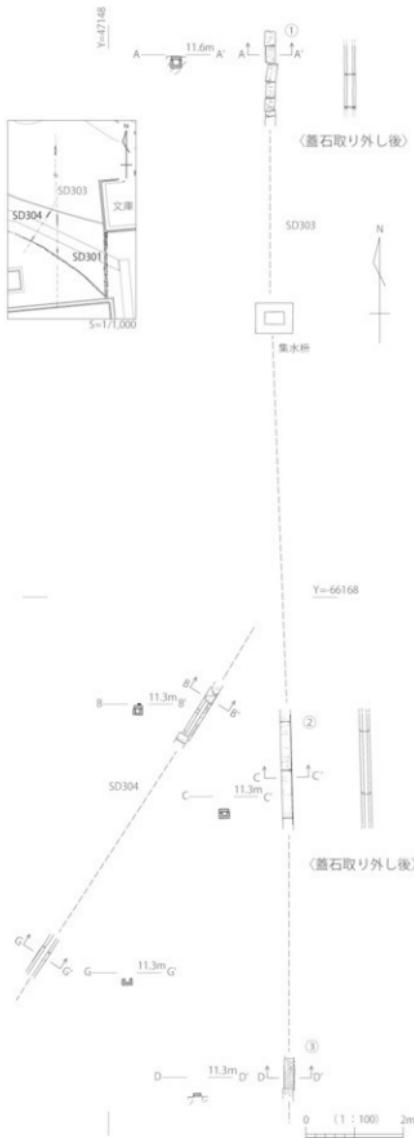
#### （1）遺構に伴う遺物（第11図、図版7）

石垣 SW305 出土遺物 1 は長さ 21.9cm、断面方形の折釘である。2～4 は古銭である。2・3 は古寛永（初鑄年 1636 年）、4 は新寛永（初鑄年 1697 年）である。

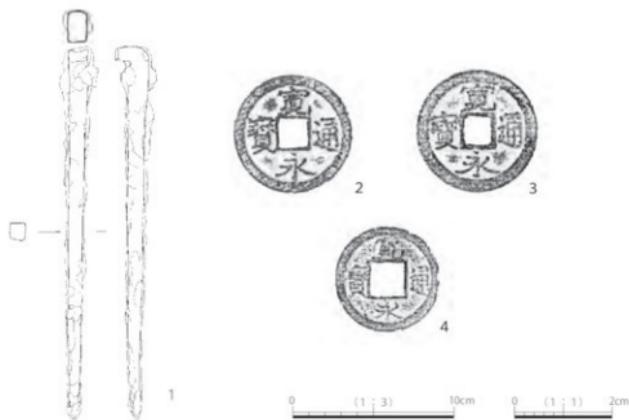
#### （2）遺構に伴わない遺物（第12図、図版7）

工事立会の際に遺物を採取しているが、いずれも小片であり、図化できたものはわずかである。

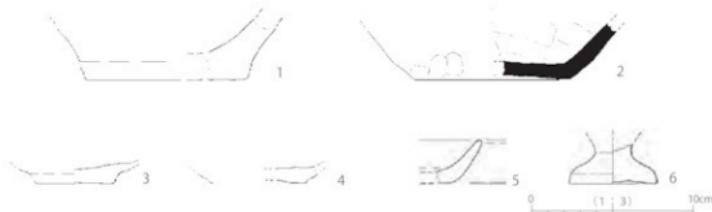
**弥生土器（第12図1、図版7）** 1 は壺又は甌の底部である。内外面ともナデの痕跡が残る。



第10図 石樋 SD303・SD304 実測図



第11図 素鷦社石垣 SW305 出土遺物実測図（1は1：3, 2～4は1：1）



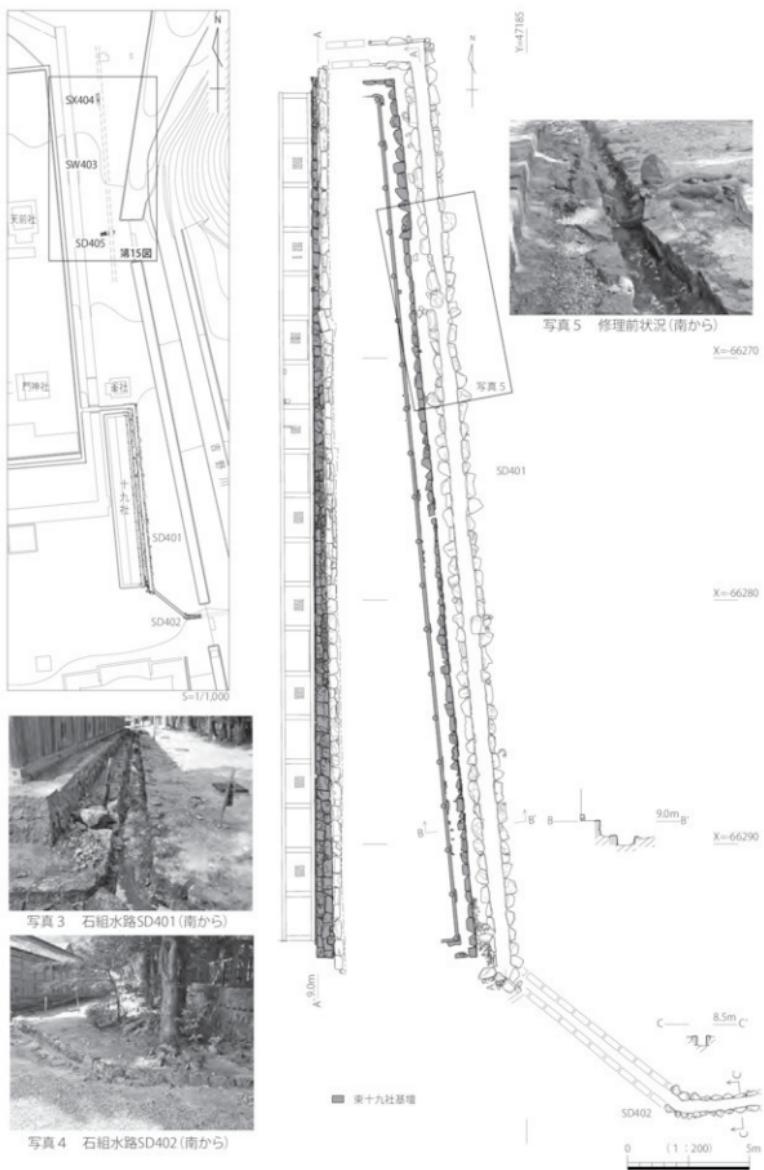
第12図 遺構外出土遺物実測図

須恵器（第12図2） 2は壺もしくは甌の底部である。内面には板状工具によるナデの痕跡、外面には、ナデの後、指で押された痕跡が残る。中世須恵器と考えられるが、時期は不明である。

土師器（第12図3～6） 素鷦社南で行なわれた排水路工事の際には、土師器の小片が多く出土している。図化した3～6は中世土師器である。3～5は皿で、3と4の底部には回転糸切り痕が見える。6は柱状高台付壺である。いずれも12～13世紀頃のものである。

## 第2節 瑞垣東側の調査

瑞垣東側調査区には、釜社と東十九社が位置する。ここでは、東十九社東側の石組水路の改修に先立ち、図面作成等を行った。また、樹根の除去と排水路整備に伴う掘削で、寛文度の瑞垣と推定される石垣の一部が見つかった。



第13図 石組水路 SD401・SD402 実測図

## 第1項 東十九社東側水路の調査（第13図）

調査した東十九社の東側を通る石組水路は、瑞垣外周の水を吉野川へ排出するための水路である。寛文度に造られたと考えられるが、後述する寛文度の東面瑞垣との位置関係において、「社總繪圖」と整合性はとれていない。排水機能を高めるため、崩れた側石の修補と底面のレベル調整が行われた。石組水路 SD401・SD402（第13図） 石組水路 SD401・SD402は、延長68mの水路である。それぞれの水路について、崩れた側石の修補が行われる部分を記録した。

SD401は、瑞垣から東に延び、十九社北東隅で南に折れ南下する48mの水路である。内幅は0.6m、深さ約0.4mで、蓋石と底石ではなく、側石は径50～60cmを中心とする長方体の割石が用いられている。SD402は、SD401の南端から七口門の脇を通り、吉野川までの区間（20m）に設置されている。内幅0.4m、深さ0.4mで、蓋石と底石ではなく、径30cm前後の割石で組まれている。SD401より用いられる石が小さく、内幅も狭い。「出雲大社全図」（文化7年（1810））によると、東十九社東側を通る水路は、そのまま境内南方へと延びているが、現況のSD402は、吉野川へ向け東流する。このことから、SD402は「出雲大社全図」が描かれて以降に付け替えられた水路であることがわかる。

出土遺物はいずれも小片であるが、須恵器、土師器、磁器などが出土している。

## 第2項 瑞垣東側の調査（第15図、図版3）

平成23年度に行われた瑞垣内の調査では、筑紫社の北と南の2か所のトレーナーで溝状の断面が確認された（第14図）。寛文度の西面瑞垣の溝と考えられ、瑞垣の範囲を想定できる成果を得ている。今回の瑞垣東側の調査においては、寛文度の東面瑞垣が見つかることが想定されていた。

### 石垣 SW403（石列 SX404・石組水路 SD405 第15図、図版3）

現在の瑞垣の東側で確認した遺構である。文庫南20mの石列 SX404と、その南26mで確認した石組水路 SD405が、南北に一直線上に並ぶ。

SD405は、西側側石に長さ80cmを超す切石、東側側石に径30～40cmの割石が用いられている。内幅は0.9m、

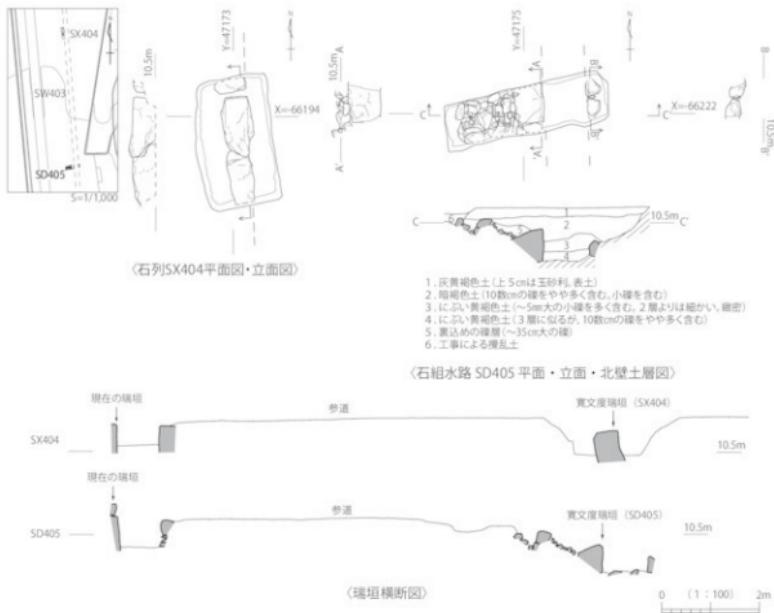
深さ0.4mで底石はない。西側側石の裏側には、10～35cm 大の裏込めと考えられる礫が多数置かれ、側石とともに、暗褐色土で一括して埋められていた。水路内から、いずれも小片であるが、土師器、陶磁器が出土している。

SX404は、長さ100cmを超す切石が、東向きに面を揃えて並ぶ。掘削範囲が狭小であったため、これに対応する石列は確認できなかった。また、樹根による擾乱で、層位の確認はできていないが、石列の上面から背面にかけて、SD405と同程度の大きさの礫を多数確認した。

それぞれ調査範囲が狭小であり、詳細な調査ができていないが、SX404とSD405は、現在の東面



第14図 平成23年度調査区位置図と寛文度瑞垣想定ライン



第15図 石垣SW403(石列SX404・石組水路SD405)実測図

瑞垣の東約10mの位置で、南北に並ぶ。両者を結んだ軸線は西へ4°傾き、この傾きは、瑞垣内で見つかった寛文度の西面瑞垣の軸線とほぼ平行する。このことから、SX404とSD405は同じ遺構の一部であり、検出位置から、寛文度の東面瑞垣SW403と推定され、寛文度瑞垣の東西幅は約81m(約44.5間)と復元できる。

### 第3項 出土遺物(第16・17図、図版7)

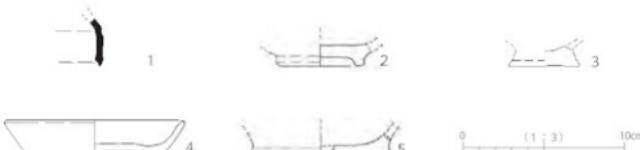
#### (1) 遺構に伴う遺物(第16図)

石組水路SD401出土遺物(第16図1~3) 1は須恵器である。壺蓋の小片で古墳時代後期のものである。2は龍泉窯青磁碗で15世紀頃のものである。3は中世土師器の柱状高台付环である。

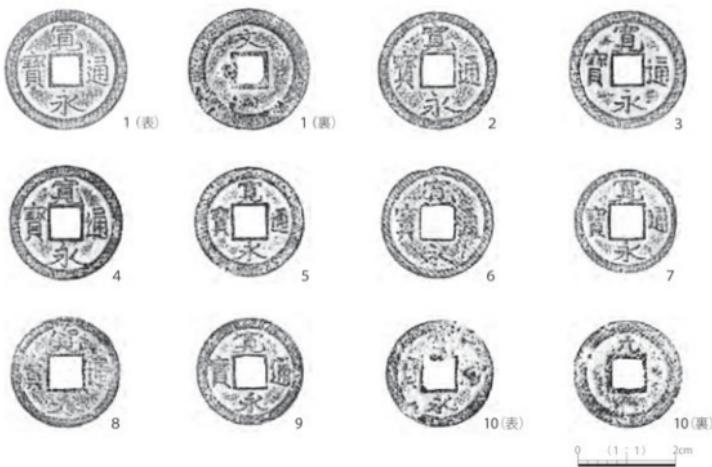
石垣SW403出土遺物(第16図4・5) 土師器、陶磁器の小片が、わずかであるが出土した。4・5は、SD405から出土した土師器の皿である。4は、中世土師器で底部に回転糸切り痕が見える。時期は16世紀後半。5は、17世紀頃の近世土師器で、底部を回転糸切り後ナデ調整する。

#### (2) 遺構に伴わない遺物(第17図、図版7)

工事立会の際に土師器、陶磁器、古銭を採取した。土師器、陶磁器は、小片で図化できなかった。古銭(第17図、図版7) 1~10は寛永通宝である。いずれも新寛永で、このうち、1は文銭(初鋤年1668年)、10は細字背元(初鋤年1741年)である。



第16図 石組水路 SD401・石垣 SW403 出土遺物実測図



第17図 遺構外出土遺物実測図

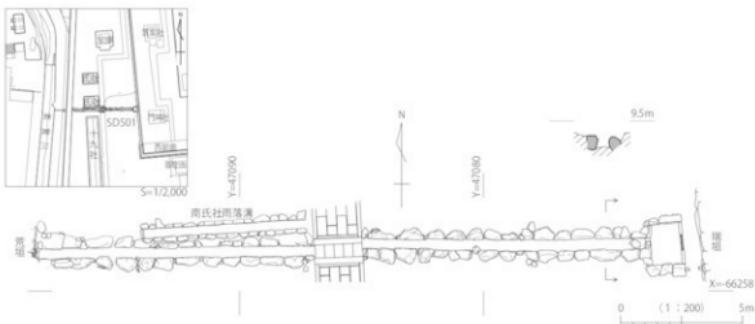
### 第3節 瑞垣西側の調査

瑞垣西側調査区には、宝庫、氏社2棟、西十九社が位置する。氏社と十九社の間を通る石組水路の改修に先立ち、面図作成等を行った。

#### 第1項 石組水路の調査（第18図）

氏社と十九社の間を通る石組水路は、瑞垣外周の水を素鷲川へ流すための水路である。水路の底面のレベル調整と補修、石組水路内に管を通した後に埋める暗渠排水化が行われた。

石組水路 SD501（第18図） 氏社と十九社の間を通る延長 25 m の水路である。径 50 ~ 100 cm 大の割石で組まれており、内幅は 0.3 ~ 0.4 m、深さ約 0.4 m で、底石はない。中央部分を参道石畳が横断し、この参道石畳の東部分では、石組水路の内側にコンクリート製水路が埋設されていた。このように、SD501 は後世の改変を受けてはいるが、荒垣の下を通ることから、「社總繪圖」に描かれていたる寛文度造営にあたり計画的に造られた水路と考えられる。



第18図 石組水路 SD501 実測図

## 第2項 出土遺物

拝殿西側調査区では、工事立会で中世土師器を採取しているが、いずれも小片で図化できなかった。

## 第4節 瑞垣南側の調査

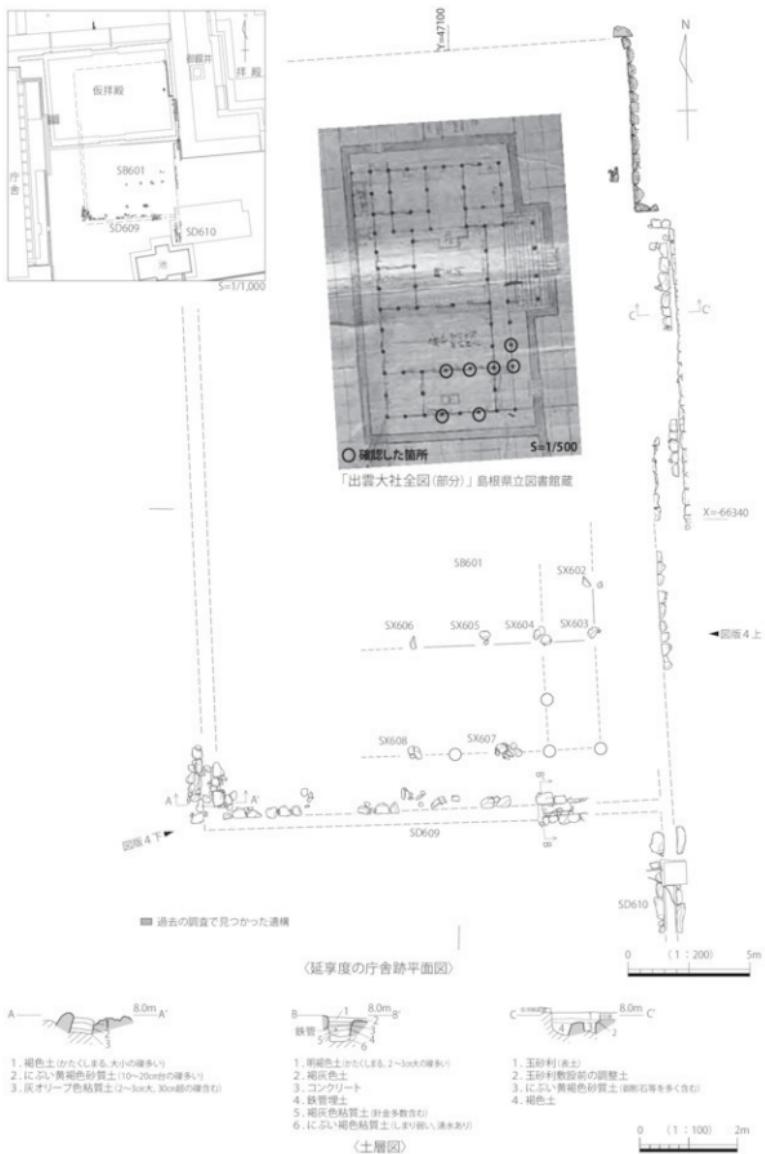
瑞垣南側調査区には、拝殿、 庁舎、 神祐殿などが位置する。過去の発掘調査で、八足門前では宝治度・慶長度の本殿跡、拝殿周辺では、中世の本殿遺構や慶長度の御供所と推定される建物跡SB01が見つかっている。今回の調査では、拝殿南西で延享度の建物跡や基壇と考えられる石垣、拝殿南でピット群などが見つかった。

## 第1項 延享度の建物跡に関する遺構の調査（第19図、図版4）

拝殿南西には、昭和28年に火災で焼失するまで、延享度に建築された庁舎（以下、旧庁舎）が置かれていた。この旧庁舎は、「出雲大社全圖」から、梁間7間、桁行12間の東側に入口をもつ建物で、建物の周りには、雨落溝が廻り、雨水は南方の池に注がれていたことがわかる。地表面に石組の一部が露出した状態にあったため、調査により旧庁舎跡が見つかることが想定されていた。

礎石建物跡 SB601（第19図、図版4） 先述した旧庁舎跡である。地表面を約15cm鋤取りしたところ、礎石の根石と考えられる遺構（SX602～SX608）が見つかった。掘削深度が浅く、SX606のように石を1個検出したのみの箇所もあるが、遺構の配置から、建物南東部分と考えられ、復元できる柱間は約2.0～2.4m（6～8尺）で、「出雲大社全圖」の旧庁舎の柱間とほぼ重なる。

石組水路 SD609（第19図、図版4） 細石建物跡 SB601の周囲を廻っていた雨落溝である。平成18年度の仮拝殿建設に伴う調査の際に、北東部分が見つかっている。工事の進捗状況にあわせての調査となつたが、東辺、南辺、西辺の一部を確認した。割石組みの水路で、両側の側石を確認できたのは、南辺の2m分、西辺の3.2m分のみである。水路は、内幅0.45m、深さ0.4mで、底石は認められない。水路内にはモルタルや鉄管の埋設があり、改変を受けている部分が認められた。



第19図 延享度庁舎に伴う遺構実測図

雨落溝の東張り出し部では、面を向かい合せて並ぶ2条の石列を確認している。遺構が壊れているものの、平行して南北に延び、北端部は直角に折れて西へ延びる。南北部分は内幅が0.1～0.2mと狭いため、排水機能が果たせるとは考えにくいが、折れ曲がった先では、内幅が0.6mに広がる。改変を受けた石組水路の可能性があるが、その痕跡の確認はできず、性格は不明である。

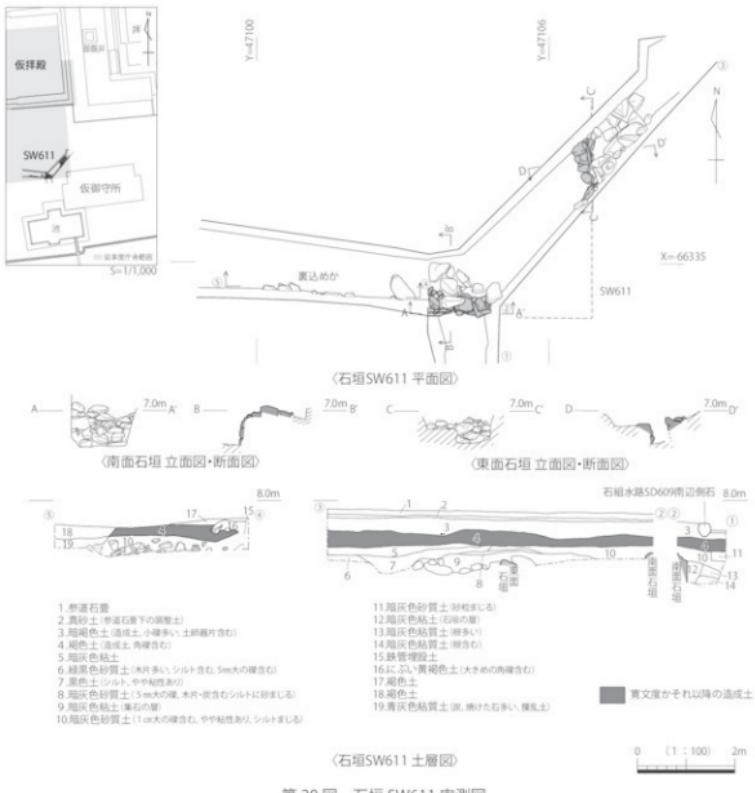
石組水路 SD610（第19図） 旧庁舎雨落溝 SD609の南東隅から延び、境内南中央にある池に接続する水路である。延長7mのうち、4m分が見つかった。仮御守所入口の踏み石で分断され、水路内にモルタルが散かれるなど造り替えられてはいるが、現状では、内幅は約0.4mで、SD609と同規模である。

## 第2項 石垣の調査（第20図、図版5）

旧庁舎跡（礎石建物跡SB601）の下層、寛文度かそれ以降と考えられる造成土の下に堆積する暗灰色土層（第20図上層図9・10）で、基壇と考えられる石垣が見つかった。

石垣 SW611（第20図、図版5） 基壇と考えられる石垣の南面と東面である。南面石垣は、地表下0.8mの暗灰色砂質土層（10）で最上段を確認した。検出時には、石が東西1.5m、南北1mの範囲に広がっており、石の広がりのない南側を地表下1.4mまで掘り下げたところ、径20～60cmの自然石を高さ0.6～0.8m積んだ石垣であることが判明した。しかし、直上に鉄管が埋設され攪乱を受けていることから、最上段の石には、原位置を保っていないものや、石垣に伴わないものも含む可能性がある。東面石垣は、南面石垣の北東4mで見つかった。暗褐色土層（3）から性格不明の石が層をなしており、これらを取り除いた地表下1mの暗灰色粘土層中（9）で、明らかに南北に並ぶ1.2mの石列が現れた。石列の東側に堆積する石を一部取り上げ、地表下1.4mまで掘り下げたところ、径20～50cmの自然石を高さ約0.5m積んだ石垣であることを確認した。

南面石垣の西端から西へ3.5mの区間では、南面石垣の延長部分の裏込めの可能性がある石を確認した。南面、東面それぞれの軸線の交点から計測すると、南面石垣の延長は、6.5mを超す。また、湧水等により、両面とも最下段まで確認できていないが、さらに数段積まれている可能性があり、石垣の高さは、1mを超す可能性がある。出土遺物がないため、後述する境内の層序関係から推測すると、慶長度より古い時代の建物の基壇の可能性がある。



第20図 石垣 SW611 実測図

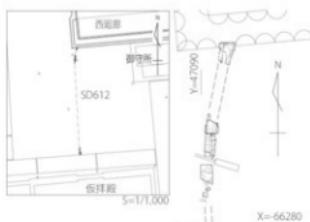
### 第3項 その他の遺構の調査（第21・22図）

瑞垣（西廻廊）南西で砂岩製の石樋、拌殿南側でピット群が見つかった。

石樋 SD612（第21図） 瑞垣外周の水を境内南方へ流すため、瑞垣南西隅に設けられた砂岩製の石樋を連結させた水路である。既に遺構の一部が壊されており、また、瑞垣外周の溝との接点部分と、その南23mで見つかった部分のみを調査したため、断片的な観察に留まるが、幅20～24cm、厚さ5cmの板状の蓋石の下に、長さ62cm、厚さ20cm、幅25cmの砂岩を凹状に加工した石樋（内幅24cm、深さ23cm）が連結して延びる。先述した石樋SD303・SD304と同構造であることから、延享度かそれ以前のものと考えられる。

ピットSP613～617（第22図） 拌殿南で見つかった5基のピットである。寛文度かそれ以降の造成土と考えられる褐色粘質土（3）の下層、褐色砂（12）上面で見つかった。ピットの直径は10～28cm、

深さは5~30cmである。位置に規則性がなく、また調査範囲が狭小のため、性格は不明である。SP613については、柱の痕跡が土層からうかがえるものの、それ以外のピットについては单一の埋土ないし、ほぼ水平に上が堆積しており、柱の痕跡を直接的にうかがうことはできない。SP616の埋土中からは種子（桃）が見つかっている。またピット南方では、30cm大の石と径10cm前後の石が複数見つかっているが、ピットと同様に性格は不明である。後述する層序関係から推測すると、これらの遺構の時期は、慶長度の可能性が考えられる。



X=66280

#### 第4項 出土遺物（第23図、図版7・8）

拝殿南側調査区では、遺構に伴う遺物を確認することはできなかった。工事立会の際に遺物を採取したが、いずれも小片であり、図化できたものはわずかである。

土師器（第23図1、図版8）1は高環の脚筒部である。古墳時代中期～後期のものである。図化はできなかったが、このほか甕の胴部の小片などが8点出土している。

陶磁器（第23図2・3、図版7・8）2は18世紀前半の肥前系陶器の碗である。3は陶器製の擂鉢で、江戸時代後半のものである。産地は不明である。

瓦（第23図4）4は近世以降の井戸瓦片もしくは壁材である。

X=66290

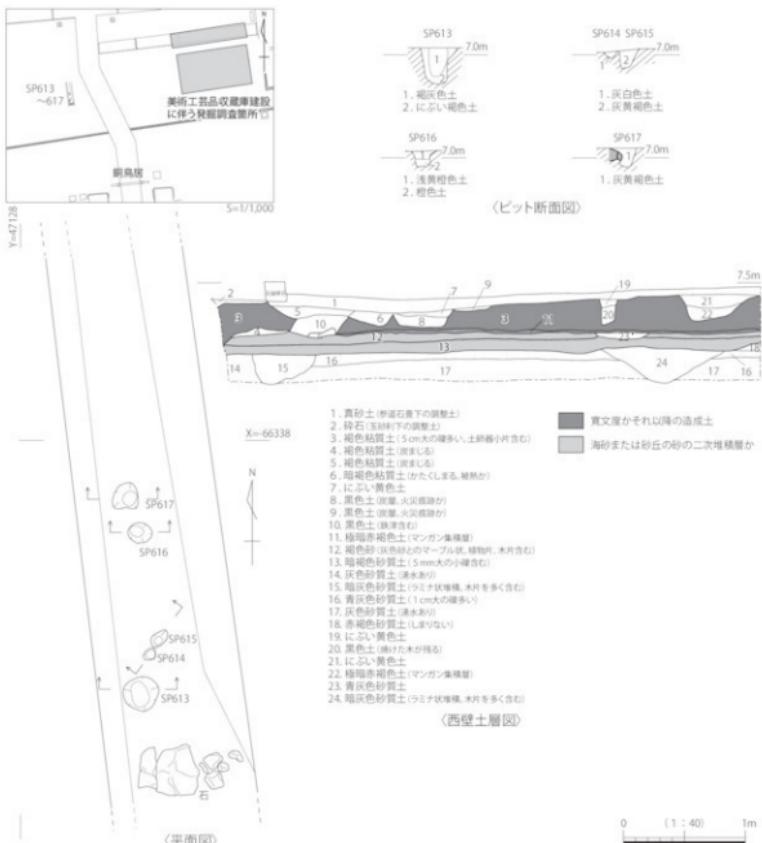
#### 第5節 南面荒垣周辺の調査

荒垣は、出雲大社境内を画する石垣である。南面荒垣は境内の南方を区画する石垣で、この中央やや東寄りに、寛文6年（1666）建立の銅鳥居が建つ。この南面荒垣周辺では、石組水路を3条確認した。また、東南七口門の西約28mに位置する御手洗井付近での工事立会の際には、焼土・炭層を確認し、鉄滓が出土した。



2m

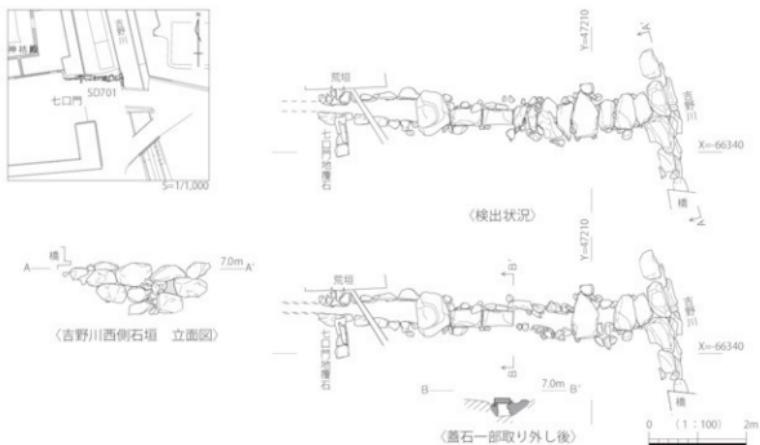
第21図 石垣 SD612 実測図



第22図 ピットSP613～617実測図



第23図 遺構外出土実測図



第24図 石組水路SD701 実測図

## 第1項 石組水路の調査（第24～26図、図版6）

石組水路3条を調査した。

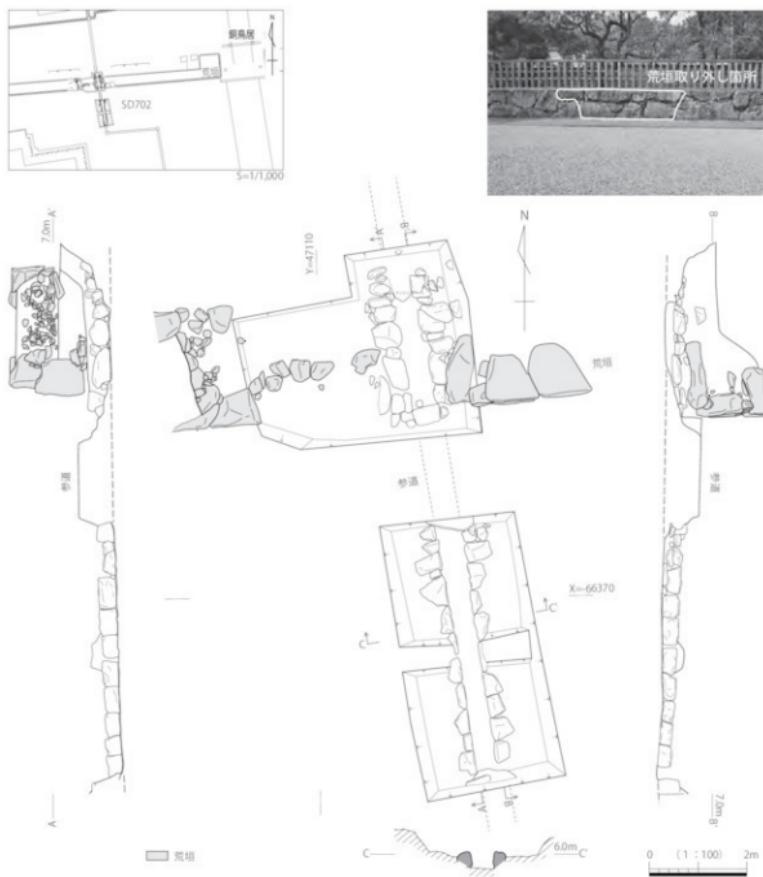
石組水路SD701（第24図） 境内南方の東西水路のうち、東南七口門から外で暗渠となっている5.2m分である。「出雲大社全図」にも描かれ、現在も吉野川への排水機能を果たしている。

水路の内幅は0.3m、深さ0.3～0.4mで底石はない。蓋石には切石と割石が混在し、側石には10～20cm大の自然石が積まれている部分があるなど、用いられている石の大きさや形は不揃いである。工事の計画変更により、詳細な調査は行わなかったが、水路底面より深い部分に、複数の配管配線が埋設されていることを確認し、数度の造り替えが行われていることがわかった。掘削時に陶磁器片や平瓦が出土している。

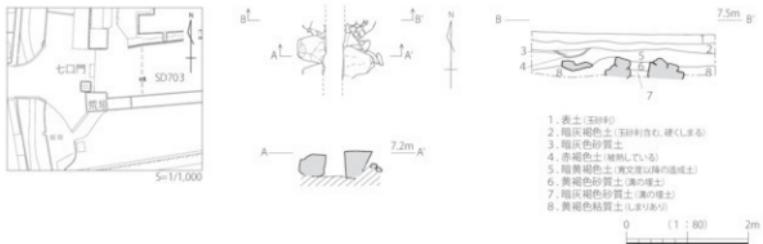
石組水路SD702（第25図、図版6） 排水路整備と、その後に予定されていた銅鳥居修理に伴う迂回路とするため、銅鳥居の西約30mの荒垣が取り外されたところ、石組水路SD702が見つかった。「社縦繪圖」にも描かれている南北方向の石組水路の一部である。径50cm前後の石で組まれた水路で、内幅0.4～0.5m、深さ約0.3mを測る。見つかった時点で、水路内には、排水用の塩化ビニールパイプが通されていた。パイプで隠れ、底面を確認できていないが、一部に底石状のものが認められた。蓋石はないが、側石の上には、荒垣の根石や栗石と考えられる石が置かれていた。

荒垣を取り外す際に、裏込め土や石の間から、また、石組水路SD702掘削時に土師器や陶磁器などが出土している。中世から近代のものを含むことから、この部分では、過去にも荒垣の積み直しが行われたと考えられる。

石組水路SD703（第26図） 西南七口門から東へ10mの地点で見つかった南北水路の一部である。現在は機能していない。割石で組まれた水路で、内幅約0.3m、深さ約0.35mを測り、底石はない。



第25図 石組水路 SD702 実測図



第26図 石組水路 SD703 実測図



第27図 鉄滓出土地点

SD702と同様に「社總繪圖」に描かれている水路で、境内南西の池から境外へ排出するための水路と考えられる。埋土中から、須佐焼の鉢鉢が出土している。

## 第2項 工事立会の成果（第27図、図版6）

東南七口門から西へ21～26m、御手洗井近くの表土下約0.5mの褐色砂質土層上面で、土師器を多量に含む焼土の層と炭の層を確認した。また、鉄滓が出土している。

平成22年度に実施した国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物防災施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査では、この北東約3mで鉄滓が出土している。今回の掘削では、焼土層の最上面が確認できたのみであるが、過去の調査では報告がない土師器片を多量に含む層を確認した。時期は不明であるが、境内内域のこの辺りで鍛冶作業が行なわれていた可能性が高いと考えられる。

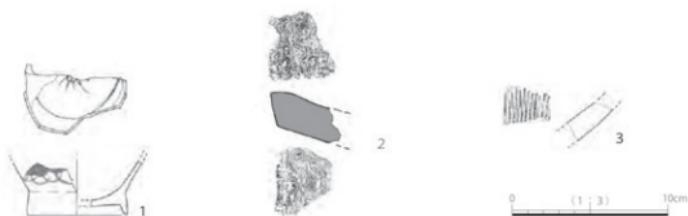
## 第3項 出土遺物（第28・29図、図版7・8）

遺構に伴う遺物を図示する。遺構に伴わない遺物もあるが、小片であり、図化できなかった。

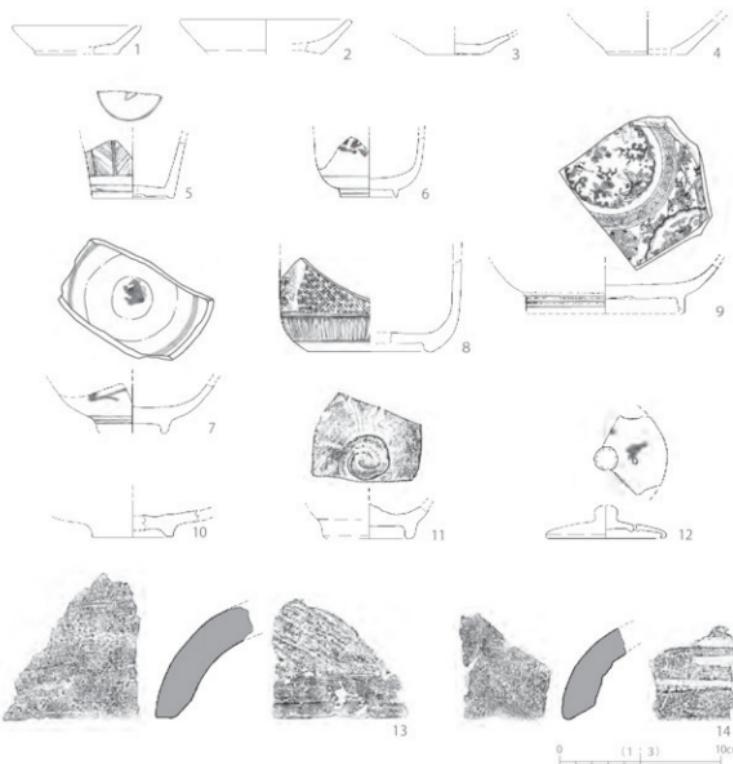
石組水路 SD701出土遺物（第28図1・2、図版8） 1・2とも蓋石直上から見つかった。1は伊万里焼の広東碗の底部で、18世紀末から19世紀前半のものである。2は中世末頃の平瓦である。

石組水路 SD702・荒垣出土遺物（第29図、図版8） 荒垣を取り外したのは4.5mほどの区間であるが、石の間や裏込め、石垣の下から中世から近代の土師器、陶磁器が出土した。1～4は中世上師器である。1～3は皿、4は環で、いずれも底部に回転糸切り痕が見られる。16世紀後半のものである。5～9は磁器である。5は矢羽文の猪口、6は小杯、7は蛇ノ目釉剥ぎの端反形の碗である。8は筒型碗、9は蛇ノ目凹型高台の皿で、見込に花唐草、蝶が描かれる。7は18世紀末～19世紀前半の磁器であるが、このほかは幕末から明治以降のものである。10～12は陶器である。10は17世紀代の肥前陶器である。11は徳利か瓶の底部で時期は不明である。12は幕末以降の蓋である。13・14は瓦である。13はコビキAの丸瓦で戦国時代、14はコビキBの丸瓦で江戸時代ものである。

石組水路 SD703 出土遺物（第28図3）3は須佐焼の描鉢の小片で、17世紀後半から18世紀のものである。



第28図 石組水路 SD701・SD703 出土遺物実測図



第29図 石組水路 SD702・荒垣出土遺物実測図

## 第6節 出土遺物觀察表

圃場番号	土の性質		耕種耕作	法線(cm)			刈取率	初期・調整・文縫の処理	施肥	色調	届考			
	調査区	(高さ・位置)		耕種	上部 (耕深)	底地 (耕深)								
11-1	福岡北斎	高木(西側)	—	耕 (高さ1.5m)	1.9	0.7×1.9	2.1×1.9	重畠	打替・分刈・底地の整備(耕深延長)、草引手前・割込(草引に付ける)	古賀水	黒	明治 1636年		
11-2	福岡北斎	高木(東側)	—	高木(高さ) (底地)	245.0m	24.5m	200.0m	内刈(底地)	古賀水	葉目 2.5g	古賀水	明治 1636年		
11-3	福岡北斎	高木(東)	—	高木(底地)	245.0m	24.5m	200.0m	内刈(底地)	古賀水	葉目 3.39g	古賀水	明治 1636年		
11-4	福岡北斎	高木(西)	—	高木(底地) (高さ2.2m)	22.0	1.8m	内刈(底地)	古賀水	葉目 1.66g	古賀水	明治 1636年			
12-1	福岡北斎	高木(南)	—	(高さ)	—	—	1/8	内ニチナ 内ニチナ	—	やや黄	褐	明治 1636年		
12-2	福岡北斎	高木(南)	—	(高さ)	—	—	底刈1/3	内ニチナ	高木水	—	灰	明治 1636年		
12-3	福岡北斎	高木(南)	—	高 (中土の高さ)	—	—	底刈1/4	内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	浅黄	明滅		
12-4	福岡北斎	高木(南)	—	高 (中土の高さ)	—	—	底刈1/2	内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	暗	明滅		
12-5	福岡北斎	高木(南)	—	高 (中土の高さ)	—	—	2.6	小山	—	—	暗	明滅が美しい		
12-6	福岡北斎	高木(南)	—	粗糲な草付	—	—	底刈2/3	内ニチナ	—	—	暗	明滅		
16-1	福岡東斎	SD401	濱石頭	—	—	—	—	小山	内ニチナテ 内ニチナ	—	灰	古河	古墳時代	
16-2	福岡東斎	SD401	濱石頭	—	—	—	—	底刈1/4	内ニチナ	—	—	灰	オーリーブ	15世紀
16-3	福岡東斎	SD401	濱石頭	—	—	—	—	底刈の整備(底地)	内ニチナ	—	—	暗	明滅	
16-4	福岡東斎	SD405	理土	高 (中土の高さ)	30.7	8.1	—	1/4	内ニチナ 内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	暗	明滅	
16-5	福岡東斎	SD405	理土	(高さ1.5m)	—	—	底刈1/6	内ニチナ 内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	—	暗	明滅	
17-1	福岡東斎	御社東	—	高木(高さ) (底地)	25.2m	25.2m	18.1m	新貴水(底地)	葉目 2.74g	—	—	明治 1668年		
17-2	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	24.5m	24.5m	19.5m	新貴水(底地)	葉目 2.47g	—	—	明治 1636年		
17-3	福岡東斎	御社東	—	高木(高さ) (底地)	23.5m	23.5m	19.0m	新貴水(底地)	葉目 3.67g	—	—	明治 1636年		
17-4	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	23.5m	23.5m	19.0m	新貴水(底地)	葉目 2.36g	—	—	明治 1636年		
17-5	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	22.7m	22.7m	17.5m	新貴水(底地)	葉目 2.48g	—	—	明治 1636年		
17-6	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	23.1m	23.1m	19.5m	新貴水(底地)	葉目 2.09g	—	—	明治 1636年		
17-7	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	21.5m	21.5m	18.0m	新貴水(底地)	葉目 1.94g	—	—	明治 1636年		
17-8	福岡東斎	御社東	—	高木(高さ) (底地)	23.0m	23.0m	19.0m	新貴水(底地)	葉目 2.53g	—	—	明治 1636年		
17-9	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	23.0m	23.0m	19.0m	新貴水(底地)	葉目 1.72g	—	—	明治 1636年		
17-10	福岡東斎	御社東	—	高木(底地)	22.4m	22.4m	12.0m	新貴水(高さ)	葉目 1.98g	—	—	明治 1741年		
23-1	福岡南斎	東十九日向	暗褐色土 (底地)	—	—	—	—	内ニカミナ 内ニカミナ	—	—	—	明滅		
23-2	福岡南斎	街の南東	暗褐色土 (底地)	—	4.5	—	1/2	街の南東内に施地、脚の斜面	—	—	明オリーブ	16世紀		
23-3	福岡南斎	舟折南	青色粘土質土 (底地)	(25.1)	—	—	—	内ニチナ 内ニチナ	—	—	—	江戸後半		
23-4	福岡南斎	舟折南	褐色土 (文縫)	—	—	—	—	内ニチナ 内ニチナ	—	—	—	江戸後半		
28-1	画面南向西	SD701	高木土 (高さ)	(0.7)	—	(6.2)	底刈1/2	街の南東内に施地、脚の斜面に文縫あり	—	白	明治 100年			
28-2	画面南向西	SD701	高木土 (高さ)	平地	4.8	5.3	2.1	重畠	内ニチナ 内ニチナ	—	—	明治 100年		
28-3	画面南向西	SD703	理土 (底地)	—	—	—	—	内ニチナ 内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	—	明治 100年		
29-1	画面南向西	荒川	高木土 (中土の高さ)	(7.5)	(5.0)	1.8	1/4	街の南東内に施地、脚の斜面に文縫	—	—	—	明滅		
29-2	画面南向西	荒川	高木土 (中土の高さ)	(10.0)	(7.0)	2.1	1/6	街の南東内に施地、脚の斜面に文縫	—	—	—	明滅		
29-3	画面南向西	荒川	SD702 葉土 (中土の高さ)	(—)	(—)	(—)	底刈1/2	内ニチナ 内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	—	明治 100年		
29-4	画面南向西	荒川	葉石頭	(—)	(—)	(—)	—	内ニチナ 内ニチナ	底地の整備(底地切り)	—	—	明治 100年		
29-5	画面南向西	荒川	葉石頭	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		
29-6	画面南向西	荒川	SD702 葉土 (中土の高さ)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明治 100年		
29-7	画面南向西	荒川	葉石頭	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		
29-8	画面南向西	荒川	葉込土 (底地)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明治 100年		
29-9	画面南向西	荒川	葉込土 (底地)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明治 100年		
29-10	画面南向西	荒川	葉込土 (底地)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明治 100年		
29-11	画面南向西	荒川	SD702 葉土 (中土の高さ)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		
29-12	画面南向西	荒川	葉石頭	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		
29-13	画面南向西	荒川	葉石頭	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		
29-14	画面南向西	荒川	SD702 葉土 (中土の高さ)	(—)	(—)	(—)	—	内刈	内刈	—	—	明滅		

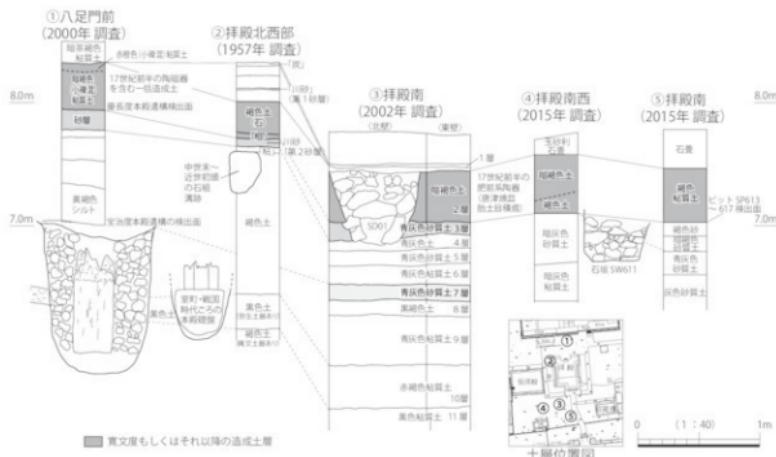
## 第4章 まとめ

平成25年(2013)度から3か年にわたり国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物環境保全事業等に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。遺構を分断しながらの調査にならざるを得ず、遺構のつながりを検証する上で問題を残すものもあったが、造営をはじめとする境内利用の変遷を示す遺構を新たに発見することができた。以下、調査成果を時代別にまとめる。

### 第1節 慶長度造営以前

出雲大社境内遺跡で、遺構の時期を判断する指標の一つが、寛文度造営(寛文7年(1667))の際に、境内のかさ上げ、高燥化を図るために行われた盛土(造成土)の層である。過去の調査において、八足門前や拝殿南側で約40cmの盛土が確認されている(景山ほか2004、第30図)。

このうち、拝殿南側の層序関係については、慶長度(慶長14年(1609))の御供所と推定される建物跡SB01が見つかった際に詳しく報告されている(景山ほか2004)。それによると、寛文度もしくはそれ以降の造成土の下には、洪水により短期間に形成された堆積層(青灰色砂質土)が堆積する。この洪水堆積層上面が、建物跡SB01が見つかった慶長度の遺構面と考えられ、この下層には、中世から近世初頭に形成されたと考えられる層が1m以上堆積する(第30図③)。よく似た層序関係は、石垣SW611の調査でも確認しており、SW611は、寛文度もしくはそれ以降の造成土の下に堆積する暗灰色砂質土層で見つかった(第30図④)。出土遺物がないため、年代の特定はできないが、この層序関係から推定すると、慶長度より古い時代に発生した洪水による土砂で埋まった遺構と考えられ、



第30図 出雲大社境内遺跡の基本層序模式図(松尾2004を元に作成)

今回見つかった遺構のなかで、最も古い遺構にあたる。

御供所と推定される建物跡 SBO1 が建てられていた慶長度の境内については、「紙本著色杵築大社近郷絵図」(北島家蔵)からうかがい知ることができる。考慮すべき部分のある絵図<sup>(1)</sup>であるが、この時代の境内の復元に際しては、参考とすべき資料の一つである。

御供所については、『杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚』(千家家蔵)に、「三間ニ六間」と記されている。のことから、建物跡 SBO1 が御供所であれば、今回の瑞垣南側の調査において、建物西側部分が見つかることが想定された。しかし、この周辺には、寛文度や延享度に相次いで庁舎が建築されているため、既に消滅している可能性もあり、石列や柱穴などの遺構を確認できず、御供所であることを決定づける発見には至らなかった。

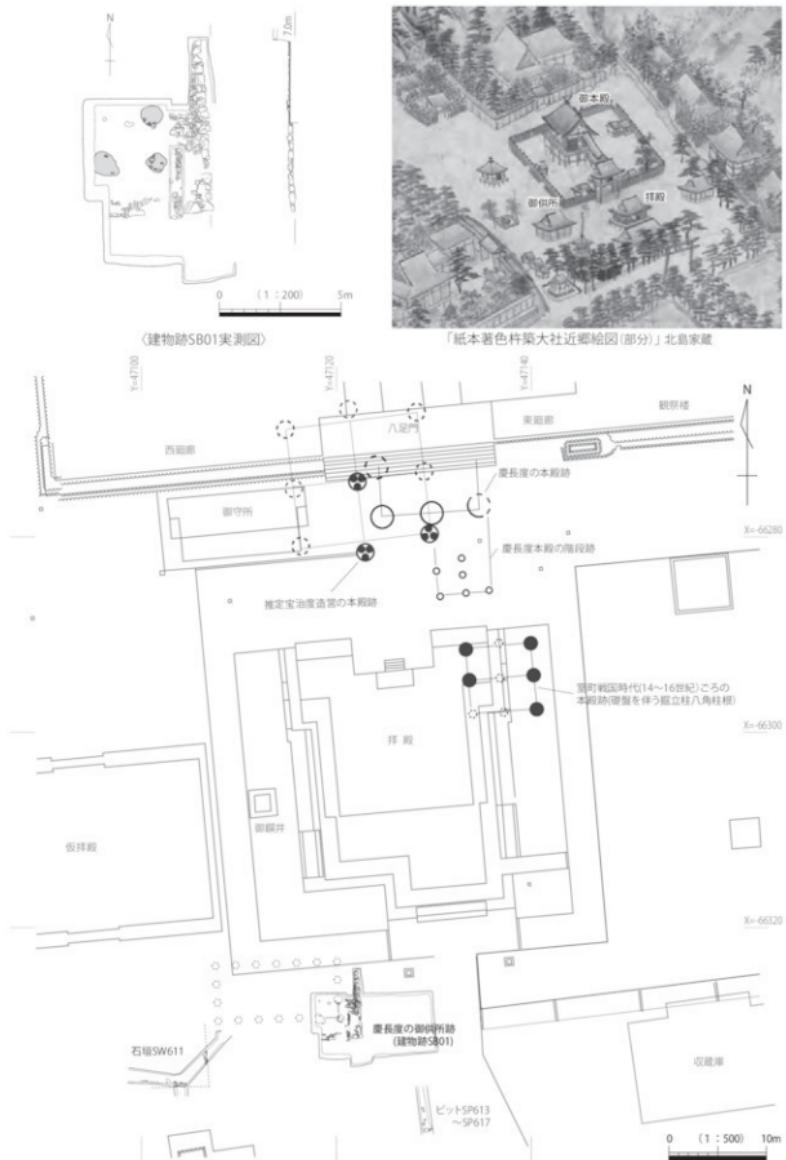
既に指摘されているように、「紙本著色杵築大社近郷絵図」には描かれていない建物が、慶長度の境内に存在していたはずである(千家 1996)。しかし、今回、境内のほぼ全域を立会調査したが、拝殿南で見つかったピット SP613 ~ 617 (第22図)のほかに、慶長度の可能性が考えられる遺構は見つかっていない。建物跡 SBO1 の西側部分も見つからなかったことからは、既に消滅している可能性のほか、御供所は「三間ニ六間」より小規模であった可能性、もしくは、SBO1 は御供所ではなく、「三間ニ六間」より小規模の建物であった可能性など、今後様々な可能性を考えなければならない。出雲大社境内という性格上、面的な調査は困難ではあるが、建物跡 SBO1 の性格の再検討を含め、過去からの調査成果を再検証することで、各時代の境内の復元が進むことを期待する。

なお、ピット SP613 ~ 617 については、性格は不明であるが、寛文度もしくはそれ以降の造成土の直下に堆積する褐色砂と暗褐色砂質土上面で検出した。注目されるのはこの層序関係(第30図)で、褐色砂と暗褐色砂質土層は、建物跡 SBO1 の調査時には確認されていない。しかし、平成 25 年(2013)、境内東南部で行なわれた出雲大社美術工芸品収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査<sup>(2)</sup>の際には、寛文度もしくはそれ以降の造成土の直下で、5 ~ 30cm 堆積する褐色系の海砂または砂丘の砂の二次堆積層を確認した。そして、この下層に堆積する炭層は、AMS 年代測定により 1488 年から 1640 年という年代が得られている。拝殿南と境内南東部で確認できた褐色系の砂層が同一層であるのか、層位のつながりの検証には課題が残るが、寛文度かそれ以降の造成土の下で年代を特定できる堆積層であり、今後、中世の層序関係を検討する際の指標となる「鍵層」と考える。

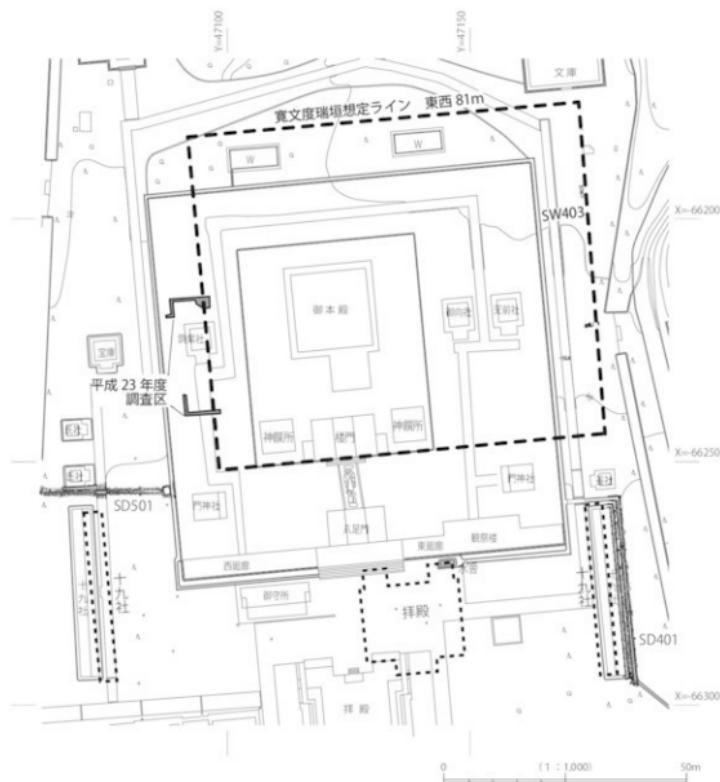
## 第2節 寛文度造営

寛文度の造営遷宮は、境内から三重塔などの仏教施設が排除され、本殿が仮殿式ではなく、正殿式で造営されたことに特徴がある。続く延享度の造営遷宮(延享元年(1744))では、本殿を含め、ほとんどの建物の造り替えや移築が行なわれたため、今なお寛文度造営時から場所を移さずに残るのは、銅鳥居、荒垣、石組水路などわずかしかない。

今回の環境保全事業等においては、境内の建造物への影響を考慮し、排水路整備が行われた。寛文度造替の状況を示す「社總繪圖」にも排水路が描かれており、境内の排水対策は当時も重要であったことがうかがえる。荒垣の下をくぐる石組水路 SD501 (第18図), SD702 (第25図), SD703 (第26



第31図 建物跡 SB01 と慶長度の遺構配置図



第32図 寛文度境内推定復元図

図)は、この指図に描かれる水路である。このうち、SD703は、既に廃絶されているが、SD702は造られた当時の水路を生かしながら、排水機能を高め、現在も機能している。また、SD501は、「社縦繪圖」と「出雲大社全図」との比較から、付け替えが考えられ、また近年の改変も受けているが、今なお境外への排水を担う。寛文度の石組水路が、幾度の改修を経て今なお機能している様子に、当時の排水計画の周到さがうかがえる。

境内を画する荒垣については、SD702の調査時に、唯一南面の一部を確認できた。出土遺物から、過去に積み直しが行われたことが考えられるが、寛文度における荒垣とその周辺の造成の過程をうかがうことができる(第25図)。南面荒垣を挟んで境内と境外では、現地表面の高さで約50cmの高低差があり、境内側の石垣が造成後の地盤から築かれているのに対し、境外側は50~60cm低い位置から築かれている。また、裏込めの栗石は、境内側の現地表面より上層でしか確認できなかった。この状況から、寛文度造営にあたり、①排水路を整備する ②境外側の荒垣の下部を積む。石組水路部

分は、側石の上に直接根石を置く ③境内が盛上でかさ上げされる ④境外側の石垣上部を積む  
⑤境内側の石垣を積み、裏込めを充填する といった工程がとられていたことが想定される。

このほか、調査で見つかった寛文度の遺構としては、東面瑞垣と考えられる石垣 SW403（第15図）がある。根石が裏込め石とともに埋められた様子を確認できたことから、瑞垣は複数段積まれた石垣であったことが明らかとなった<sup>(3)</sup>。平成23年度に行った瑞垣内の調査では、西面瑞垣の痕跡と考えられる溝跡が見つかっており（曾田2013）、今回の調査成果とあわせると、寛文度瑞垣は、東西幅約81m（約44.5間）となる。その規模は、「杵築大社宮中繪圖面」に描かれた瑞垣（東西幅約39.5間）より大きい。しかし、延享度の瑞垣（現瑞垣、東西約44間・南北約43間）も、同絵図に描かれた瑞垣（東西41間・南北42間）より大きいことから、今後、発掘調査の成果とあわせ検証が必要である。なお、南面・北面瑞垣はまだ見つかっていない。同絵図を参考にすると、南北は約68m（約38間）であり、第32図のように寛文度瑞垣の範囲を復元できるが、実際には、南北にやや伸びる可能性がある。

### 第3節 延享度造営以降

延享度造営以降は、文化度（文化6年（1809））、明治度（明治14年（1881））、昭和度（昭和28年（1953））、そして今回の平成34回の遷宮が行なわれているが、いずれも修造遷宮であり、現在の境内は延享度造営時の様相を留める。しかし、昭和28年の火災で拝殿や庁舎等が焼失したため、現在本殿南側に位置する建物は昭和と平成の時代に造られたものである。

延享度の旧庁舎に関する遺構については、建物周囲を廻る雨落溝SD609のうち、北東隅を含む石列7.2mが平成18年度の調査で見つかっている（曾田2013）。今回の調査成果をあわせると、雨落溝の範囲は、東西約18.5m（約10間）、南北約31.5m（約17.5間）と復元でき、旧庁舎の具体的な場所と範囲が明らかとなった。古写真から、雨落溝の建物側の側石は外側より高く積まれ、周辺よりも一段高い基壇内に建物が建てられていたことが分かる。しかし、火災後の整地にあたり、周辺地盤と同じ高さになるよう、建物の柱の礎石などともに、雨落溝の側石などが取り除かれたのか、建物の残存状態は良くなく、柱の痕跡を7か所で確認できたのみである。反面、境内のわずか10cm地下には、延享度の遺構が眠っていることが明らかとなった。

このほか、延享度以降の遺構としては、東南七口門の外で見つかった石組水路SD701（第24図）がある。近年の改変を受けているが、「出雲大社全図」にも描かれる水路で、現在も機能する。また、砂岩製の石樋SD303・SD304（第10図）、SD612（第21図）は、延享度かそれ以前に敷設されたと考えられる。敷設時期は、遺物の出土がないため、SD303の延長が延享度造営の瑞垣の下をくぐることから推測するものである。これらの遺構の発見により、境内地下には、指図に描かれていない遺構も存在することが明らかとなった。

また、石垣改修が行われた素麿社は、寛文度造営により拡張された境内の北方に鎮座する。立地は寛文度から変わらないが、寛文度境内を描いた「社總繪圖」などには、楕円状に敷地を閉む石垣が描かれている。現在のように敷地周囲を石垣で方形に区画された様子は、延享度造営以後の指図などで確認できるようになることから、石垣SW305は延享度以降に造られたと考えられる。しかし、二段

の基壇は描かれていないため、築造時期に時間差があった可能性も考えられるが、今回の調査では、その築造時期を明らかにすることはできなかった。

以上、今回の調査成果をまとめた。

出雲大社の平成の大遷宮は、60年ぶりに執り行われた修造遷宮であった。出雲大社境内を発掘調査すると、古代から今日まで、繰り返されてきた造営遷宮の痕跡が見つかる。今回の調査でも、新たな遺構が見つかったが、近年の地下掘削により、遺構の一部が壊れている部分も認められた。しかし、多くは、石を動かしたのち、再び元の状態に戻されるなど、境内の地下には、造営遷宮をはじめ境内利用の変遷を示す資料が、今なお良好な状態で眠っていることが明らかとなった。

多くの制約の中、十分な調査、検証ができなかったが、本報告が今後の研究の資料の一つとなることを願い、研究の深化を期待する。

#### 【註】

- (1) 「紙本著色杵築大社近郷絵図」と同じ大きさで同じ構図の「寛永御絵図」が千家家に伝わる。これらの絵図について、千家和比古氏は、寛文度の造替作業中の寛文4年(1664)に絵師西山久三郎が作成した下絵を、寛永9年(1632)を越えていない時に清画されたものであること、下絵作成時点では、建物の取り壊しや造成工事が進捗しているため、絵図のような全景況は存在せず、実景描写と復元描写が混在し、復元描写されなかつたものもある、と指摘している(千家 1996)。
- (2) P.6 を参照。平成29年度報告予定。
- (3) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会の岡信治氏により、寛文度瑞垣は2段以上組まれていたが、延享度の造営に際し、最下段を残して上段の石を外し、現瑞垣に転用されていることが確認されている。

#### 【参考文献】

- 出雲大社 1956『出雲大社國寶防災施設工事報告書』
- 景山真二ほか 2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会
- 公益財団法人いづも財團・出雲大社御遷宮奉賛会 2015『出雲大社の造営遷宮と地域社会(下)』(いづも財團叢書2)
- 今井出版
- 島根県古代文化センター 2013『出雲大社の寛文造営について一大社御造営日記の研究一』(島根県古代文化センター 調査研究報告書48)
- 千家和比古 1996「出雲大社の、いわゆる神仏習合を伝える絵図の検討」『古代文化研究第4号』島根県古代文化センター
- 曾田辰雄 2013「第Ⅲ部 発掘調査」『国宝出雲大社本殿ほか22棟防災施設工事報告書』宗教法人出雲大社
- 奈良文化財研究所編 2003『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会
- 藤澤彰 1998「出雲大社の宝治・慶長・寛文度造営頃の境内建築の復元について」『古代文化研究第6号』島根県古代文化センター
- 松尾充晶 2004「考古学的所見のまとめ」『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会

# 図 版





素鷺社石垣 SW305 修理前（南から）



素鷺社石垣 SW305 修理前（西から）



素鷺社石垣 SW305 修理前（南西から）



素鷺社石垣 SW305 修理前（南東から）



素鷺社石垣 SW305 修理後（南から）



素鷺社石垣 SW305 修理後（西から）



素鷺社石垣 SW305 修理後（南西から）



素鷺社石垣 SW305 修理後（南東から）

図版2 瑞垣北側の調査



石組水路 SD301（北から）



石組水路 SD301 蓋石取り外し後（北から）



石樋 SD303（南東から）



石樋 SD303 蓋石取り外し後（南東から）



参道縁石（文庫付近）工事前現況（北西から）



参道縁石（素戔社南西付近）工事前現況（北東から）



石列 SX404 (北東から)



石組水路 SD405 (南東から)



石列 SX404 (北から)



石組水路 SD405 (南から)



石列 SX404 裏込め石 (南から)



石組水路 SD405 裏込め石 (北東から)

図版4 延享度序舎跡の調査



延享度序舎 建物跡 SB601（東から）



延享度序舎 雨落溝（石組水路 SD609）（南西から）



石垣 SW611 南面石垣（南から）



石垣 SW611 東面石垣（東から）



石垣 SW611 全景（北東から）

図版6 南面荒垣周辺の調査



南面荒垣 石垣取り外し後断面（西から）



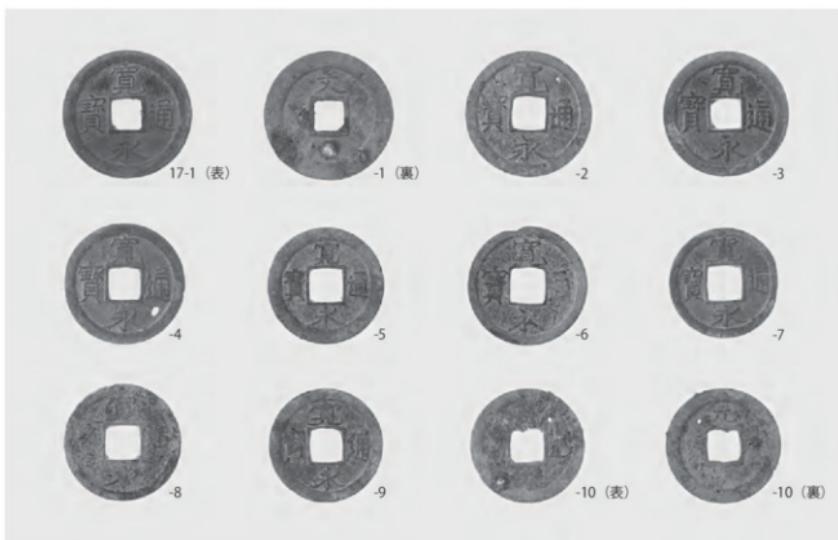
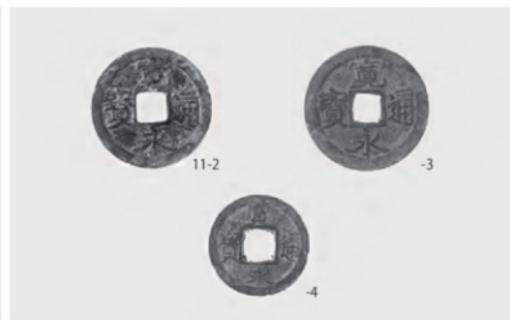
石組水路 SD702（南から）



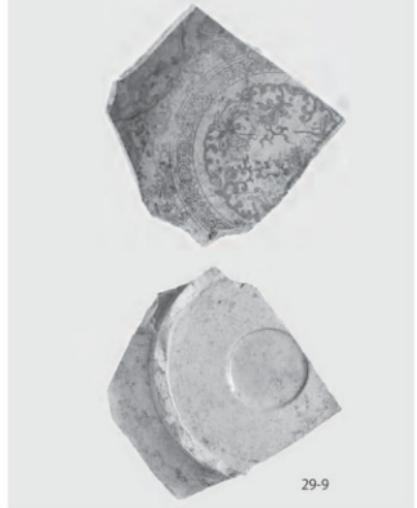
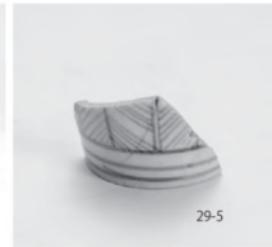
南面荒垣 石垣取り外し後断面（東から）



鉄津出土地点の状況（北東から）



図版8 出土遺物（2）



## 報告書抄録

出雲市の文化財報告 35

平成 28 年度 出雲市文化財調査報告書

**出雲大社境内遺跡**

平成 29 年 (2017) 3月

編 集 出雲市市民文化部文化財課  
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地  
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会  
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地  
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 株式会社 報光社